

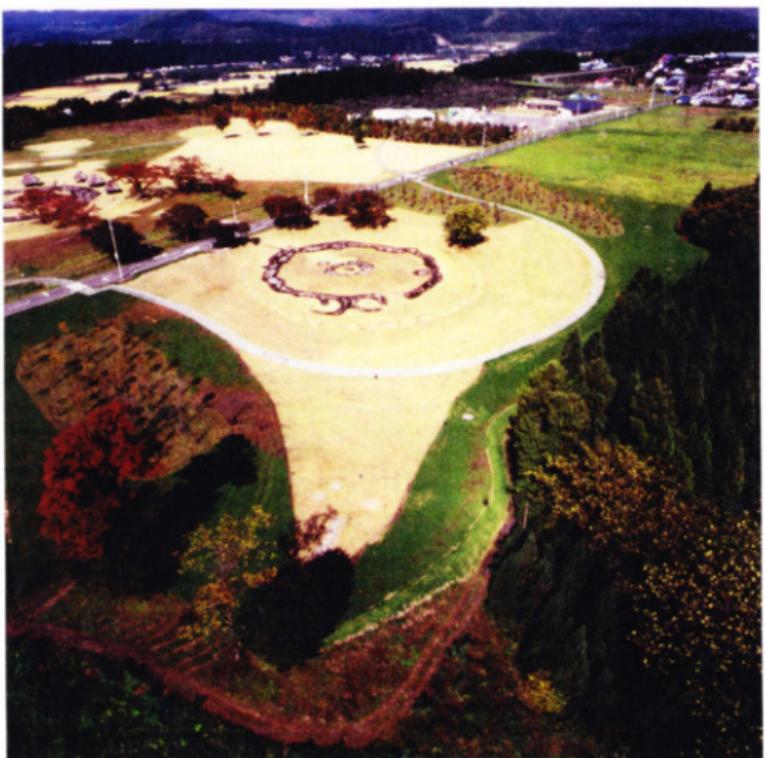
特別史跡

大湯環状列石

発掘調査報告書(24)

2008. 3

鹿角市教育委員会



序

大湯環状列石は、万座・野中堂環状列石を主体とする縄文時代後期に営まれた大規模な「マツリと祈り」の場です。

昭和6年に発見され、26年・27年の文化財保護委員会の発掘調査を経て、その特異な形態から昭和31年には国特別史跡に指定されております。

文化庁ならびに秋田県教育委員会のご指導とご協力を得て59年から継続してまいりました発掘調査も第24次調査となり、各々の環状列石を中心に掘立柱建物跡・土坑・遺物廃棄域などが同心円状に分布すること、環状列石の原型と考えられる一本木後口配石遺構群や万座北側の環状に配置された建物群などが発見され、性格解明も進んでおります。

また、平成10年度には文化庁の地方拠点史跡等総合整備事業に採択され、環境整備事業を開始しました。

環境整備は、本年で第Ⅱ期五ヵ年整備計画が終了いたしますが、これまでに環状列石の露出展示継続のための石材保存処理、遺構や自然環境の復元などの他、史跡のガイダンス施設として「大湯ストーンサークル館」の建設を行なっており、史跡はこれらの整備によって、環状列石や縄文文化の雰囲気を体感・理解できる状況となっております。

本年度は、第Ⅳ期環境整備に伴う基礎資料の収集を目的に野中堂環状列石南側を発掘調査し、環状列石と関連の強い配石遺構や配石列を発見いたしました。

本書はその成果をまとめたもので、環状列石や縄文文化の研究資料としてご活用くださいと幸いに存じます。

最後に、鹿角市の文化財保護行政に対してご指導とご支援を賜りました特別史跡大湯環状列石環境整備事業検討委員の各委員、文化庁文化財記念物課、秋田県教育委員会ならびに関係各位に心から感謝申し上げます。

平成20年3月31日

鹿角市教育委員会

教育長 吉成博雄

例　　言

1. 本報告書は、平成19年度に国庫補助金を得て実施した「特別史跡大湯環状列石第24次発掘調査」の成果をまとめたものである。調査の概要については現地説明会や大湯ストーンサークル館事業「縄文に学ぶ」などで発表してきたが、本報告書を正式なものとする。また、平成15年度より実施した「特別史跡大湯環状列石第Ⅱ期環境整備事業五カ年計画」が本年度で終了することから、環境整備の内容も記した。
2. 本報告書の執筆と編集は、鹿角市教育委員会生涯学習課生涯学習文化班主任 駒井安正、同主任 三浦貴子が行なった。
3. 石器などの石質鑑定は、秋田県立十和田高等学校 校長 鎌田健一氏にお願いした。
4. 土層や土器などの色調の記載には「新版 標準土色帖（日本色彩研究所）」を使用した。
5. 本報告書に使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行「毛馬内・花輪・湯瀬（1/25,000）」である。
6. 遺物の実測・探査・清書などの一連の作業は調査担当者・作業員が行った。
7. 本報告書に掲載した実測図などには各々に縮尺を示したが、写真図版については任意の縮尺とした。
8. 本文中において用語の主たるものは統一するよう努めたが、使用が数度にわたるときは簡略している場合もある。
9. 実測図、表、写真図版などで下記のような記号、スクリーントーンを使用した。

S X (S) …配石遺構・配石列	S X (f) …焼土遺構
 …遺構確認面下の層	 …焼土
10. 発掘調査並びに報告書作成、第Ⅱ期環境整備事業を進めるにあたり下記の方々よりご指導とご助言をいただきました。心から感謝申し上げます。

斎藤 忠、大塚初重、小林達雄、富樫泰時、沢田昭正、熊谷常正、安村二郎、小野健吉、本中 真、坂井秀弥、白崎恵介、平澤 純、田中哲夫、阿部義平、村越 漸、葛西 効、藤沼邦彦、岡村道雄、蔵田明史、工藤雅樹、遠藤正夫、福野裕介、高田和徳、児玉大成、佐藤智雄、板橋範芳、中村良幸、鈴木克彦、大野憲司、高橋忠彦、五十嵐一治、熊谷太郎、櫻田 隆、児玉 準、柴田陽一郎、小林 克、栗澤光男、榮 一郎、高橋 学、利部 修、武藤祐浩、宇田川浩一、谷地 薫、榎本剛治、秋山邦夫、齊藤邦雄、山田祐子、島田哲男、平出一治、菊池 賢、佐藤一憲

本文目次

序	参考文献	58
例言	写真図版	59
本文目次	報告書抄録	
図版・写真・表目次		
第Ⅰ章 遺跡の概要		
1 遺跡の位置と立地	1	
2 周辺の地形と地質	2	
3 周辺の遺跡	4	
4 遺跡の層序	12	
第Ⅱ章 調査の概要		
1 調査要項	13	
2 調査の目的	16	
3 調査の方法	16	
4 調査経過	17	
第Ⅲ章 発掘調査と環境整備		
1 発掘調査と研究	21	
2 遺跡の保存、 史跡指定と公有化事業	24	
3 環境整備	25	
第Ⅳ章 H ₁ 区の検出遺構と出土遺物		
1 縄文時代の遺構と遺物		
(1) 配石遺構	34	
(2) 配石列	37	
(3) 烧土遺構	40	
(4) 遺構外出土遺物		
① 縄文土器	40	
② 石器	41	
第Ⅴ章 分析と考察	49	
第VI章 調査のまとめ	57	

図版・写真・表目次

図 版 目 次			P L 3 第1号配石遺構(3).....	61	
第1図 遺跡の位置図.....	1	P L 4 第2号配石遺構(1).....	62		
第2図 鹿角市の地質図.....	3	P L 5 第2号配石遺構(2).....	63		
第3図 周辺の遺跡.....	6	P L 6 第2号配石遺構(3).....	64		
第4図 基本層序図(1).....	9	P L 7 第2号配石遺構(4).....	65		
第5図 基本層序図(2).....	10	P L 8 第2号配石遺構(5).....	66		
第6図 野中堂周辺地形復元図.....	11	P L 9 第3号配石遺構(1).....	67		
第7図 調査区位置図.....	14	P L 10 第3号配石遺構(2).....	68		
第8図 トレンチ・遺構配置図.....	15	P L 11 第1号配石列.....	69		
第9図 第1号配石遺構実測図.....	35	P L 12 出土土器(1).....	70		
第10図 第2号配石遺構実測図.....	36	P L 13 出土土器(2).....	71		
第11図 第3号配石遺構実測図.....	38	P L 14 出土土器(3).....	72		
第12図 第1号配石列実測図.....	39	P L 15 出土土器(4).....	73		
第13図 第1号焼土遺構実測図.....	40	P L 16 出土土器(5).....	74		
第14図 出土土器(1).....	42	P L 17 出土石器.....	75		
第15図 出土土器(2).....	43				
第16図 出土土器(3).....	44				
第17図 出土土器(4).....	45	表 目 次			
第18図 出土土器(5).....	46	第1表 周辺の遺跡一覧表.....	7		
第19図 出土石器実測図(1).....	47	第2表 発掘調査の経過と成果(1).....	19		
第20図 出土石器実測図(2).....	48	第3表 発掘調査の経過と成果(2).....	20		
第21図 万座配石遺構群略図 (昭和38~39年当時).....	50	第4表 特別史跡大湯環状列石 環境整備の経緯(1).....	30		
第22図 配石遺構形態分類図.....	51	第5表 特別史跡大湯環状列石 環境整備の経緯(2).....	31		
第23図 万座配石遺構群実測図.....	54	第6表 特別史跡大湯環状列石 環境整備の経緯(3).....	32		
第24図 野中堂配石遺構群実測図.....	55	第7表 環境整備の概要.....	33		
		第8表 万座・野中堂配石遺構群 観察表.....	53		
写真図版目次					
P L 1 第1号配石遺構(1).....	59	P L 2 第1号配石遺構(2).....	60	P L 9 表 配石列観察表.....	56

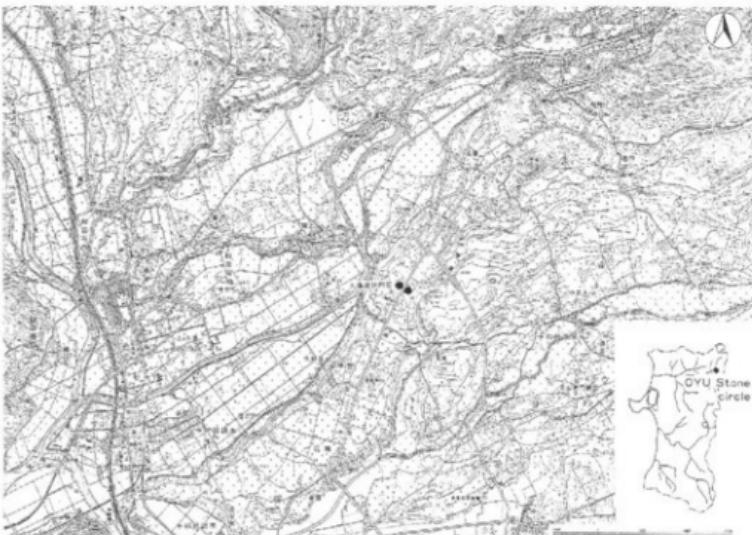
第Ⅰ章 遺跡の概要

1 遺跡の位置と立地（第1図）

鹿角市は北東北のはば中央に位置する。北に十和田国立公園、南に八幡平国立公園があり、自然に恵まれた農業と観光を主産業とする都市である。

鹿角市は日本海に注ぐ米代川上流域に位置し、東に岩手県八幡平市、西に大館市、北に小坂町、南に仙北市と県境ならびに市町境を接している。鹿角は古代には「上津野」と呼ばれ、当時から交通の要所・拠点となっており、岩手県盛岡市に通じる「鹿角街道」、青森県三戸に通じる「来濱街道」、青森県平川市碇ヶ関に通じる「鶴川街道」があり、現在、市内を南北に走る国道282号線は、鹿角街道とほぼ同じ道筋で盛岡まで通じている。また、国道と並行して通じるJR花輪線は奥羽本線大館駅を基点に、十和田湖への玄関口となっている十和田南駅を通り、岩手県IGRいわて銀河鉄道好摩駅間を結んでいる。

奥羽山脈の懷に抱かれた盆地には奥羽山脈の四角岳（1,003m）に源を発した米代川、十和田湖外輪山を源とした大湯川のほか、大小の河川によって形成された舌状台地や段丘が数多く発達している。これらの台地上には縄文時代や歴史時代など416遺跡の所在が確認されており、



第1図 遺跡の位置図

大湯環状列石は国の代表的な縄文遺跡として昭和31年に「特別史跡」に指定されている。

大湯環状列石は、大湯川と豊真木沢川・根市川の浸食によってつくられた南西方向にのびる全長5.6km、幅0.5~1.0km、標高185m~144mの中通台地（通称 風張台地）のほぼ中央に位置している。

平成10年度からは第Ⅰ期環境整備、平成15年度からは第Ⅱ期環境整備が進められ、史跡を特徴づける遺構復元や当時の自然環境を感じ取れるように樹木が植栽されている。さらに史跡北東側隣接地には縄文文化を学び・体験できる施設として「大湯ストーンサークル館」が平成14年4月に開館し、多くの見学者や研究者が訪れている。

本年度の発掘調査対象地は史跡南側・野中堂環状列石の南側に位置し、公有化以後は牧草地となっていた。

2 周辺の地形と地質

鹿角市内の地形（第2図）

鹿角市内の地形は、東西の山地、盆地内の段丘地形及び沖積低地より構成されている。

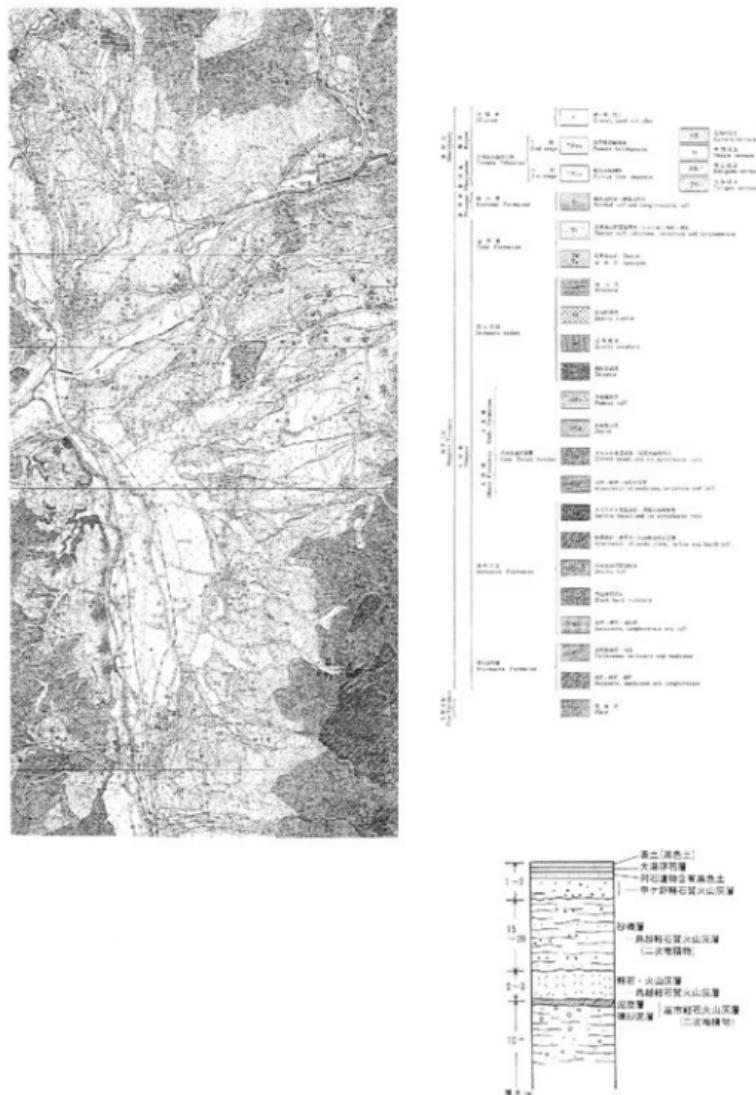
東側に連なる山並は800m~1,100mの標高で、四角岳、皮投岳（1,122m）、五ノ宮嶺（1,115m）等を中心とする急峻な壯年期の山である。地質は下位より安久谷川層、瀬の沢層、大葛層、遠部層等の新第3紀の堆積岩類や火山岩類より構成されている。

一方、西側の山地は、標高400m~600m程の丘陵性の穏やかな山並で、東側山脈と同様、下位より新第3紀中新世の大葛層、大滝層、遠部層、樅内層で構成されている。

鹿角盆地は、東の奥羽山脈、西の高森山地に囲まれ、大小の河川によってつくられた台地・段丘とともに低地がいたるところにみられる。特に鹿角市北部には十和田火山由来のシラス台地が分布し、東部や南部は奥羽山脈を源とする河川によって形成された扇状地地形が特徴的である。

盆地内の段丘は4段に分けられる。最高位の面は浦志内川や歌内川等が盆地に注ぐ付近に扇状地状にみられる面で、標高270m~330mと傾斜がやや陥しい。かなり解析され、主に河成の亜角礫～角礫からなり、風化が著しい。2段目は標高180m~250mで、南部では扇状地状の地形を残すものの、大里地区以北では厚い火碎流堆積物に覆われ、開上面・鳥越面と呼ばれ、盆地内ほぼ全域に分布している。3段目は標高180m~250mで、主に米代川左岸に沿って尾去沢から松館・荒町にかけて分布している。松館面と呼ばれており、夜明島川、黒沢川等による扇状地の解析された面と考えられている。4段目は米代川右岸沿いに大里付近まで分布する面で「大里面」と呼ばれている。標高は150m~155mと低く、上部は砂礫層を主体としている。

沖積低地は標高100m~120mで、主に砂礫層からなり、花輪や毛馬内の市街地がのる。



第2図 府角市の地質図

発掘調査周辺の地質は大きく分けて、4枚の火山灰層から構成される。最下部は高市軽石質火山灰（ $25,850 \pm 1,360$ ）の二次堆積物で、軽石や砂礫から構成され、地層中に平行ラミナやクロスラミナが発達している。この上に薄い泥炭をはさんで、厚さ2m～3mの鳥越軽石質火山灰層（ $12,000 \pm 250$ ）が重なっている。さらにこの上に水の作用によって堆積した鳥越軽石質火山灰層の二次堆積物である軽石質段丘砂礫層がのる。この層の上に風化の進んだ大形の軽石質軽石礫を含む申ヶ野軽石質火山灰層（ $86,802 \pm 130$ ）が重なっている。

最上部は黒色土層で、黒色土と黒色土の間に十和田a降下火山灰層（大湯浮石層）がみられる。

十和田a降下火山灰の降下時期については、これまでの発掘調査例から平安時代中頃、10世紀前半とされていたが、滋賀県比叡山延暦寺の僧侶が残した『扶桑略記』の記事から、この降下（噴火）時期は延喜15年7月とも言われている。噴火とともに発生した火葬流（毛馬内火碎流）は大湯川・米代川を下り、大館地区・鷹巣地区では家屋（北秋田市 胡桃館遺跡）を飲み込みながら、能代平野まで達している。

史跡周辺の地形

史跡は大湯川と豊真木沢川・根市川の浸食作用によって形成された舌状台地で、大湯市街地南側後方から全長5.6km、幅0.5～1.0kmで南北方向に延びている。

台地の北側と南側斜面とも河川の浸食によって形成され、河川から台地上面までの比高は30mを測る。斜面の形状は邊り様相を呈しており、北側斜面（大湯川を望む）を踏査したところ平場13ヶ所、湧水5ヶ所を確認した。平場はおおむね三段の高さに区分され、最も大きな平場は斜面中程にあり長さ180m×幅14m～40mを測る。湧水は万座環状列石の北西側に入り込んだ沢の水量が最も多く、以前はポンプを設置して農業用水（薬剤散布用など）として使用されていた。

一方、台地南側からは平場8ヶ所、湧水8ヶ所を確認した。台地上面から豊真木沢川までは比高25mを測る。平場は斜面下方に見られ、北側斜面に見られるものと比較するとその規模は極めて小さい。湧水地点は北側斜面と比べ多いが湧水量は細い。

3 周辺の遺跡（第3図、第1表）

鹿角市は県内でも屈指の遺跡の宝庫として知られており、縄文時代から近世にいたる各時代・各時期の遺跡が416ヶ所も所在する。遺跡の内訳は縄文時代から平安時代の単独又は複合遺跡349ヶ所、中世の館跡61ヶ所、近世の城郭関係・一里塚3ヶ所、その他3ヶ所である。これらの遺跡は、米代川や大湯川等の大小の河川によって形成された舌状台地上に分布し、特に盆地東側の台地の密集度は高い。

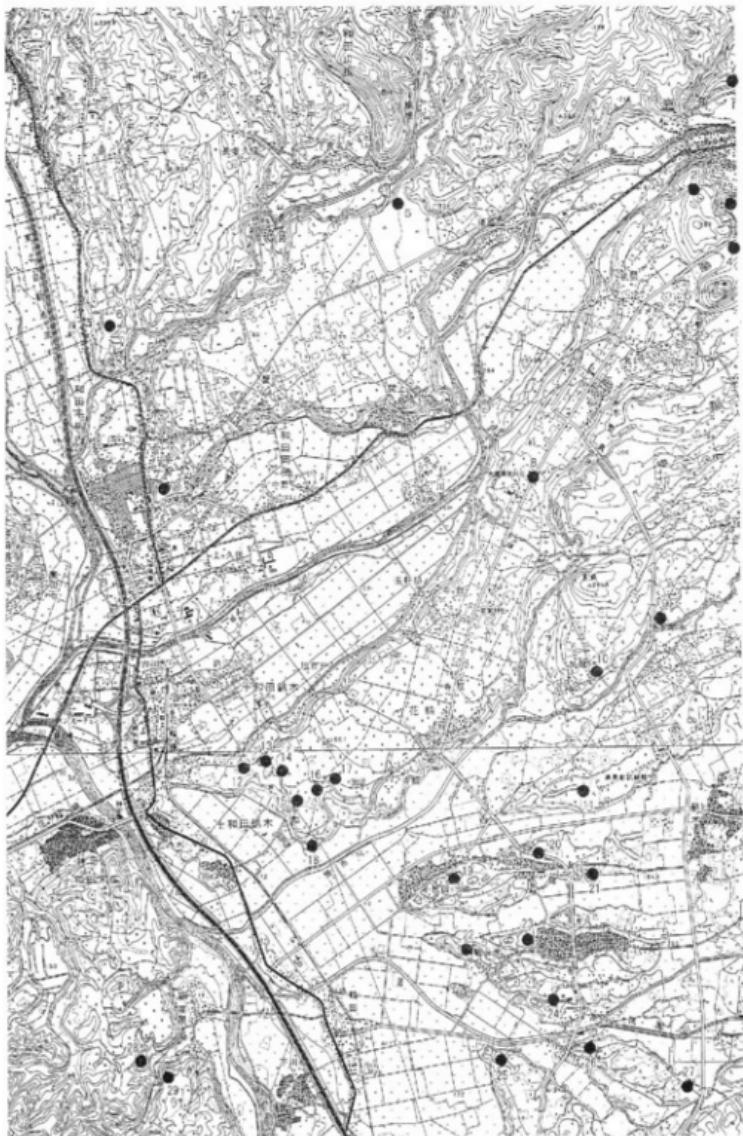
第3図は、中通台地周辺の遺跡分布図である。表記した遺跡はこれまでに発掘調査が実施されたものを抽出したものであり、それ以外の遺跡は表記していない。時代・時期順に表記した遺跡の特徴をまとめる。

図面上で最も古い時期の遺跡は、物見坂III遺跡（No.12・No.13）である。No.12は平成13年度、秋田県教育委員会により、No.13は平成16年度に鹿角市教育委員会によって発掘調査が実施されている。同遺跡名となっているが地形的な要素から本来は二つの遺跡に区分されるべきものと考えられる。秋田県教委の発掘調査によって、縄文時代早期の土器の様相が明らかにされ、鹿角市教育委員会の調査によって市内ではじめて早期の堅穴住居1棟、土坑38基が発見され、市内の最も古い集落の様子が明らかにされた。

縄文時代前期・中期を中心として営まれた遺跡は図面内に所在しない。どちらかというと鹿角市中央部や南部に所在し、代表的な遺跡は前期の清水向遺跡、中期の天戸森遺跡で、いずれも集落跡である。清水向遺跡では円筒下層d式時期の住居2棟、天戸森遺跡からは円筒上層e式～大木8・9式～中の平皿式期の住居が140棟も発見されている。

後期に至ると大規模な遺跡は減少するが、市内各地に分布するようになる。最も代表的な遺跡が特別史跡大湯環状列石であり、その周辺には環状列石と関連が強いと考えられる下内野III遺跡（No.1）、小清水遺跡（No.3）がある。さらには米代川を挟んだ高屋集落の後方台地上には高屋館跡の環状列石（No.29）が所在している。

特別史跡大湯環状列石は、昭和6年の発見以来、調査と研究が継続されている。昭和26年・27年の文化財保護委員会の発掘調査を経て昭和26年には史跡に、昭和31年には特別史跡に指定された。その後昭和48年～51年にかけて秋田県教育委員会、鹿角市教育委員会によって周辺遺跡の調査が行われ、環状列石と直接又は間接的に関連する遺跡の範囲が把握された。昭和59年からは鹿角市教育委員会が主体となり調査を行っており、現在も継続調査している。発掘調査と平行し、指定地の追加指定事務を行うとともに、平成3年度からは指定地の公有化を進め、全体の約91%の公有化がされている。さらに平成10年度に文化庁の地方拠点史跡等総合整備事業に採択され、環境整備事業が開始された。史跡が余りにも広大であることから第Ⅰ期から第Ⅳ期（Ⅰ期は5ヶ年）に分けて行うこととし、10年度から第Ⅰ期環境整備、15年度から第Ⅱ期環境整備を行っている。第Ⅰ期の主な整備内容は万座・野中堂環状列石を中心に環状列石の保存処理、遺構や自然環境の復元、仮称体験学習館（現 大湯ストーンサークル館）建設を、第Ⅱ期では万座環状列石西側地区の遺構と自然環境の復元を行っている。また、平成18年9月26日、文化庁が「世界遺産暫定リスト一覧表」への登載遺産を各自治体に公募したことから、秋田県・北秋田市の共同提案として大湯環状列石と伊勢堂岱遺跡を「ストーンサークル」として提案書を提出した。その結果平成19年1月23日、文化庁発表があり「北東北3県・北海道の縄



第3図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	遺跡の種別	遺構と遺物	時期	収集報告書・備考
1	下内野田	鹿角市十和田大字下内野	配石遺跡	配石遺跡	縄文後期	鹿角市 27『特別史跡大掛森状列石(1)』2005年
2	鹿島相跡	十和田大字下内野	遺跡		中世	鹿角市 25『鹿島の郷(3)鹿島相跡』1984年
3	小清水	十和田大字下内野	配石遺跡	配石遺跡	縄文後期	鹿角市 27『特別史跡大掛森状列石(1)』2005年
4	在原一里塚	十和田大字下内野町	一里塚	一里塚	近世	鹿角市 55『鹿角市の文化財』1998年
5	下谷沢	十和田大字下内野ノ平	配石遺跡	配石遺跡	縄文後期	鹿角市 40『下谷沢遺跡発掘調査報告書』1990年
6	鹿島相跡	十和田大字内宇宮村	遺跡・廃窯	黒土遺跡・廃窯	中世・近世	鹿角市 37『鹿島相跡発掘調査報告書』1989年
7	地蔵相跡	十和田大字内宇宮村	遺跡	部葬・土坑	中世・近世	鹿角市 36『地蔵相跡発掘調査報告書』1989年
8	大掛森状列石	十和田大字下内野	遺跡	遺跡	縄文後期	鹿角市 27『特別史跡大掛森状列石(1)』2005年
9	草木A	十和田大字木下小坂	遺物密集地	土器	縄文後期・晚期	秋田県 35『鹿角大原遺跡遺物密集地調査報告書』1975年
10	丸殿IV	十和田大字木下丸殿	遺物密集地	土器	縄文	
11	一ツ森遺跡	花輪市一ツ森	遺跡	遺跡	中世	鹿角市 30『鹿角の郷(5)一ツ森遺跡』1980年
12	物見坂遺跡	十和田大字木下見坂	遺跡	堅穴住居・土坑	縄文早期・平安	秋田県 354『物見坂遺跡』2003年
13	物見坂遺跡	十和田大字木下見坂	遺跡	堅穴住居・土坑	縄文早期	鹿角市 79『物見坂遺跡・物見坂日(1)』鹿角市 2005年
14	物見坂日	十和田大字木下見坂	遺跡	堅穴住居・古窯	平安	鹿角市 79『物見坂遺跡・物見坂日(1)』鹿角市 2005年
15	劍山I	十和田大字木下見坂	遺跡・古墳	直刀	平安	鹿角市『鹿角市史 I』1982年
16	劍山II	十和田大字木下見坂	遺跡		平安	
17	鹿角武田	十和田大字花輪字鹿角武	遺跡	堅穴住居	平安	本報告書
18	花輪家	十和田大字花輪字鹿角武	古墳	古墳	奈良末期	奈良末期『花輪家の考古学』1964年 吉川弘文館
19	小牧原跡	花輪字平元古牧	古跡・遺跡	堅穴住居・廻廊	平安・中世	鹿角市 44『小牧原跡発掘調査報告書』1992年
20	鳥居	花輪字鳥居	鳥居	堅穴住居	平安	秋田県 49『鳥居遺跡発掘調査報告書』1978年
21	高田口IV	花輪字御油平	鳥居	堅穴住居	平安末期	秋田県 49『高田遺跡発掘調査報告書』1978年に收録
22	新斗米相跡	花輪字新斗米	古跡・廻廊	堅穴住居・廻廊	平安・中世	鹿角市 14『新斗米相跡第1次発掘調査報告書』1980年
23	小平相跡	花輪字下小平	古跡・廻廊	堅穴住居・廻廊	平安・中世	鹿角市 30『鹿角の郷(5)小平相跡』1980年
24	高志向相跡	花輪字高志向	古跡・廻廊	堅穴住居・廻廊	平安・中世	鹿角市 22『高志向相跡発掘調査報告書』1982年
25	万谷寺相跡	花輪字万谷寺	古跡	古跡	中世	鹿角市 30『鹿角の郷(5)万谷寺相跡』1980年
26	高志相跡	花輪字高志	古跡	古跡	中世	鹿角市 30『鹿角の郷(5)高志相跡』1980年
27	豊野VII	花輪字豊野	鳥居	堅穴住居	平安	十和田高等学校『山経 21』1973年
28	太田谷地相跡	花輪字太田谷地	鳥居・廻廊	堅穴住居・廻廊	平安・中世	秋田県 172集『太田谷地相跡』1988年
29	高麗塙跡	花輪字塙ノ沢	遺跡	堅穴石室・廻廊	縄文後期・中世	秋田県 198集『高麗塙跡』1990年

注：鹿角市：鹿角市文化財調査資料 秋田県：秋田県文化財調査報告書

文遺跡を一体として提案する」ようにとの指摘があり、初年度の暫定リスト登録は見送られた。その後、文化庁の指導を受け、北海道・北東北3県に所在する縄文時代の代表的な15遺跡を構成資産に、4道県12市町の共同提案として平成19年12月19日に「北海道・北東北の縄文遺跡群」として再提案をしている。

大湯環状列石周辺には環状列石との関連が注目される遺跡がある。同じ台地上に位置する小清水遺跡（№3）、大湯川を隔てた下内野Ⅲ遺跡である。両遺跡とも環状列石を構築する石材である石英閃緑玢岩が多数露頭している。平成19年度の鹿角市内遺跡詳細分布調査の対象となった小清水遺跡からは縄文時代後期の住居跡1棟が確認されたが、配石遺構など大湯環状列石との手がかりとなる遺構は残念ながら少なかった。

また、高屋館跡の環状列石は平成元年に秋田県教委によって発掘調査され、直径約34mの環状列石とそれを取り囲み規則的な配置を示す26棟の掘立柱建物が発見されている。

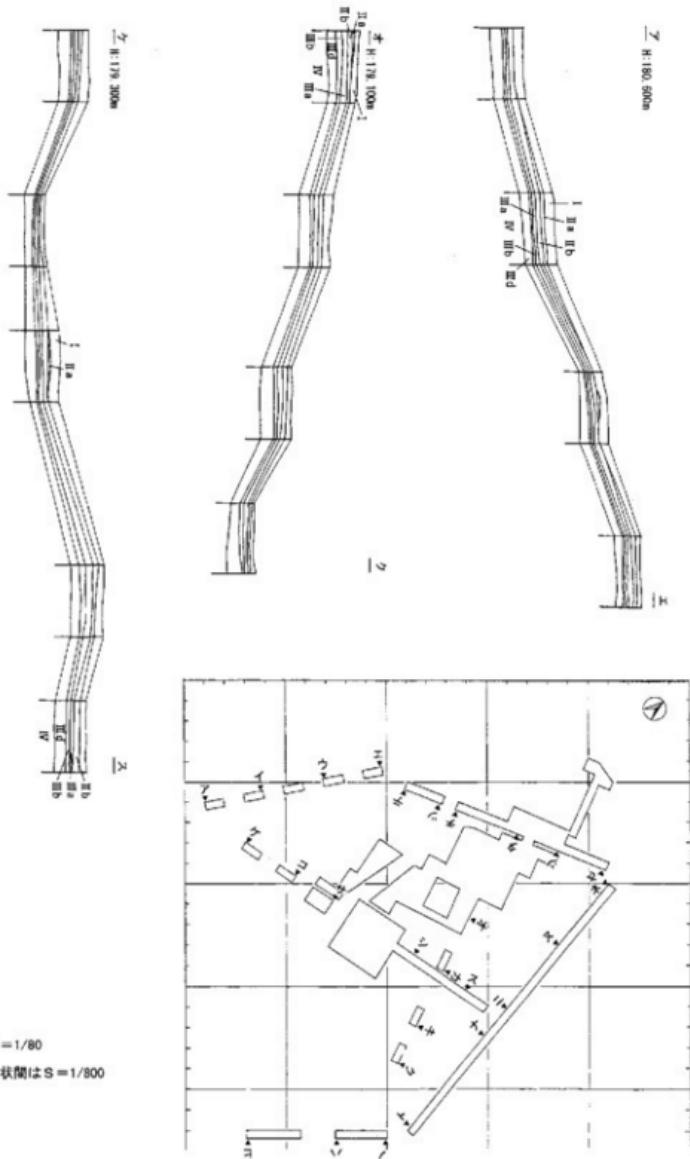
後期末葉から晩期の遺跡として草木A遺跡がある。昭和47年に鹿角広域農道建設に伴い消失する部分の発掘調査が行われた。また、平成18年にはほ揚整備事業に伴う範囲確認調査が行われている。この結果、後期末葉から晩期にかけての土器が多く出土しており、集落の存在を予期できる。

弥生時代の単独遺跡はほとんどなく、発掘調査によって土器片が出土する程度である。最もまとまって遺物が出土した遺跡は物見坂Ⅲ遺跡、物見坂Ⅱ遺跡で小坂X式土器が出土している。

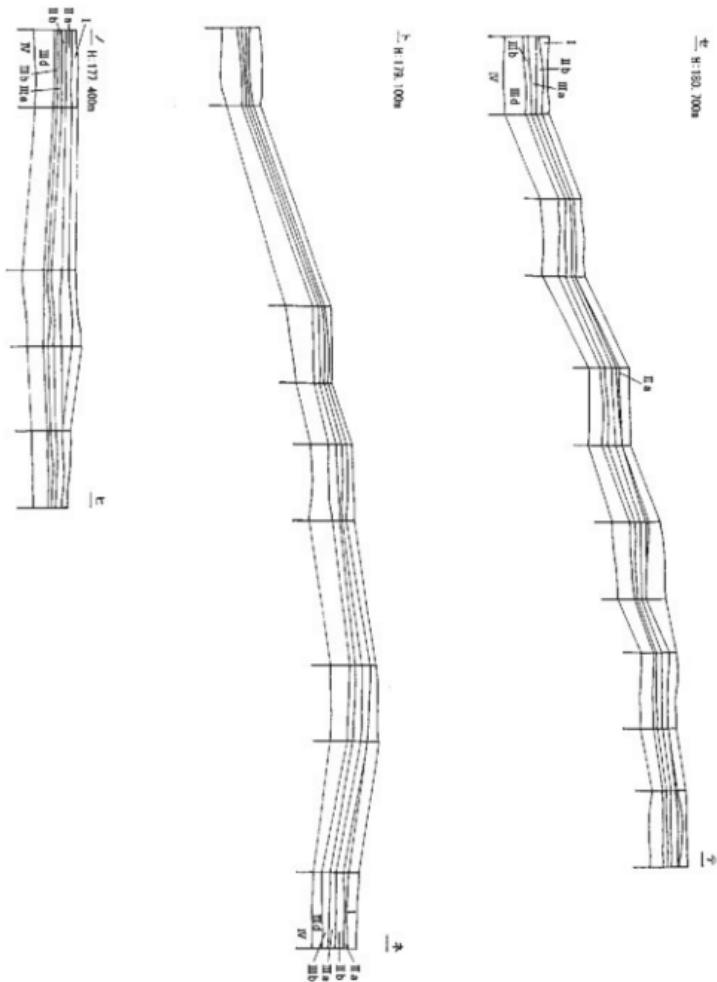
奈良時代の遺跡は鹿角市北部に集中している傾向にあり、本地城では物見坂Ⅲ遺跡（№13）、小技指館跡（№19）、源田平遺跡（№21）がこれに当たる。堅穴住居とともに丸底の土師器壺、頸部に段を有する長胴の土師器壺が出土している。

平安時代に入ると遺跡の数は爆発的に多くなり市内全域に分布する。そのほとんどは集落であるが、大湯環状列石の台地では集落とともに円墳が造られるようになる。平成17年度に調査を実施した物見坂Ⅱ遺跡では4基の円墳とともに蕨手刀2本、鎧帶金具が発見された。また、以前から知られていた枯草坂古墳（枯草坂Ⅰ遺跡 №18）は本遺跡の南側斜面中段に所在する。勾玉やガラス玉が出土しており、東京国立博物館、秋田県立博物館、大湯ストーンサークル館で公開展示されている。また、鹿角市史に紹介されている泉森出土の鉄劍は、記載文書を詳細に読み解くと本遺跡の南西側の台地縁に所在する泉森Ⅰ遺跡であることがわかる。泉森は「蝦夷森」が変化したものと考えられることから、鹿角市北半にはエミシ・蝦夷と関連した多くの遺跡がまだ地中に眠っているものと判断される。

中世に入ると鹿角地区には多くの館跡が構築される。台地の先端を空堀で区切った多郭連続式の形態が特徴となっている。承久の乱後、関東武士団に恩賞として鹿角の土地が与えられ、彼らがこの地を支配するために築いた城館である。館跡に隣接して集落が発達し「一館一村」



第4図 基本層序図(1)



$S = 1/80$
柱状間は $S = 1/800$

第5図 基本層序図(2)



图6.5 野中窑洞遗址总平面图

の形態をとっている。小枝指館跡（№19）は昭和30年東京大学東洋文化研究所によって、平成3年鹿角市教育委員会によって発掘調査が行われ、それぞれの調査によって「館は桃山時代まで存続していたこと」、「館構築の際の残土を利用し、館南側の湿地を埋め立て平場を作り出していたこと」などが分かっている。

江戸時代に入ると政情も安定し、柏崎館跡（№6）に毛馬内通代官所、花輪館跡（花輪小学校）に花輪通代官所が置かれる。毛馬内地区は鹿角街道（大館市田代～毛馬内～花輪～盛岡）、湊川街道（毛馬内～碇ヶ関）、来満街道（毛馬内～大湯～八戸）が交差する交通の要所でもあった。

4 遺跡の層序（第4図・第5図）

ここでは、表土から申ヶ野輕石質火山灰層と考えられる黄褐色火山灰層までについて記載する。それ以下の地層については先に述べたとおりである。

第I層は浮石層までの堆積層で、暗褐色土である。10cm～20cmの厚さで堆積している。

第II層はにぶい黄褐色や明黄褐色の浮石層で、十和田a降下火山灰である。本層は、浮石粒の大きさや色調などから2層（II a、II b）に分層される。II a層は粒子の細かな火山灰層、II b層は粒径0.5cm～4cmの明黄褐色の浮石である。本調査区では後世の搅乱により、II a層が消失している部分が多くみられたが、II b層についてはおおむね残存していた。

第III層は十和田a降下火山灰から地山直上の暗褐色土（第IV層）までの黒色または暗褐色の土層である。色調や土層の堅さなどから4層（III a～III d層）に分層される。III a層は混入物をほとんど含まない黒色土層で、堅くしまる。III b層も黒色土層だが、III a層よりやや軟弱な層であり、III a層とは区別される。III a層、III b層とともに遺物包含層である。III c層は極暗褐色土層だが、本調査区では確認されていない。III d層は地山粒を少量含んだ黒褐色土層で、遺物包含層であり縄文時代後期初頭の遺構確認面である。

第IV層は地山直上の暗褐色の土層で、わずかに粘性があり、しまっている。

第V層は申ヶ野火山灰層と考えられる黄褐色の火山灰層である。本層は上位に堆積する十和田a降下火山灰に対比していることから「下位火山灰」、あるいは関東ローム層に相当することからロームと呼ばれているものである。本報告書では、本層を「V層」以外に「地山」と表現することもある。確認された遺構の多くは、この層まで掘り込んでいる。調査目的である縄文時代後期の遺構は、おおむね本層よりも上面のIII d層で確認されることが多い。そのため第24次調査では本層まで掘り下げず、可能な限り上面での遺構確認に努めた。調査地は、現地形の状況から、全体的に平坦で東側の斜面に向かってわずかに下っていくことが予想されていたが、調査の結果、後世の耕作によって平坦に整地されていたもので、原地形は起伏に富んでいたことが明らかとなった。

第Ⅱ章 調査の概要

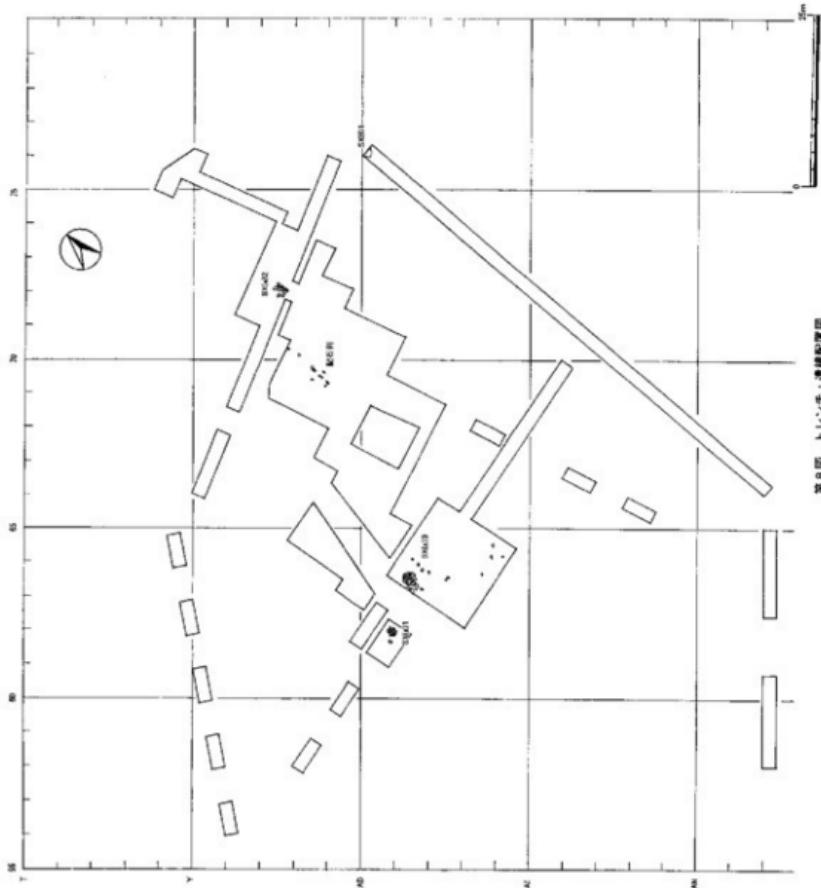
1. 調査要項

1. 遺跡名 特別史跡大湯環状列石(遺跡番号123)
2. 所在地 秋田県鹿角市十和田大湯字万座、字野中堂、字一本木後口
3. 史跡指定 指定年月日 史跡指定 昭和26年12月26日
特別史跡指定 昭和31年7月19日
追加指定 平成2年3月8日
平成6年1月25日
平成13年8月13日
- 史跡指定面積 249,833.60m²
4. 発掘調査対象地 史跡南側 H1区
5. 調査対象面積 17,400m²
6. 発掘調査面積 1,300m²
7. 調査期間 発掘調査 平成19年7月17日～平成19年11月22日
整理・報告書作成 平成19年12月3日～平成20年3月31日
8. 調査主体者 鹿角市教育委員会
9. 調査担当者 鹿角市教育委員会生涯学習課
生涯学習・文化班 主幹 藤井 安正
(本務 大湯ストーンサークル館 班長)
生涯学習・文化班 主事 三浦 貴子
(本務 大湯ストーンサークル館 主事)
10. 調査体制 調査指導 五十嵐 一治
(秋田県教育厅生涯学習課文化財保護室)
調査員 鎌田 健一 (秋田県立十和田高等学校 校長)
作業員 柳館 愛子、関 イサ、田中 栄子、成田由紀子、
三浦 茂雄、大森 勝次、佐藤 一祐、石川 三郎、
黒沢 文子、黒沢 陸雄、兎沢 寛恵子、黒沢 珠子、
湯瀬 トキ、湯瀬 晴子、成田 則子、加賀ユキ子、
奥村 愛、柳館 煙子、柳館千代子、福島美紀子、
柳沢 照子

第7図 桶ヶ谷公園



第8回 トレント、遺構配置図



11. 事務局 鹿角市教育委員会生涯学習課

生涯学習課 課長 秋元信夫

生涯学習課 生涯学習・文化班

班長 阿部安男

主任 幸藤井安正

主任 柴阿部友美範

主任 柴佐藤千絵子

主任 海沼雄一

社会教育主事 森田希仁

主事 三浦貴子

12. 協力機関 文化庁文化財部記念物課、秋田県教育委員会、

秋田県埋蔵文化財センター

2 調査の目的

昭和48年～51年に実施した分布調査により万座・野中堂環状列石のほかに遺構や遺物が広く分布することが判明した。鹿角市・鹿角市教育委員会ではこの成果をもとに昭和53年3月に「特別史跡大湯環状列石保存管理計画書」を策定し、昭和59年より広範囲に分布する遺構の形態、性格、構築時期並びに環状列石との関連解明を目的に発掘調査を開始した。昭和59年度～平成元年までは遺跡の性格解明を主目的に埋蔵文化財発掘調査事業として、平成2年からは全述の目的のほかに環境整備に伴う基本資料収集を目的に加え、発掘調査を継続している。

本年度は第IV期環境整備に係わる資料の収集を目的に、史跡南側を調査対象地に選定し環状列石と直接又は間接的に関連のある遺構の分布状況や旧地形を把握することを目的に実施した。

なお、これまでの調査地並びに調査成果は第2表・第3表に示した。

3 調査の方法

グリッドは、第1次調査以来のグリッドを使用している。N-49°-Wを基準とした5m四方のグリッドとし、グリッドの名称はアルファベットと算用数字を組み合わせ、西側の杭をもってグリッド名とした。遺跡の保存を考え、遺構の確認・旧地形の把握にはトレンチ調査を基本とした。調査区内に5m方眼のグリッドを組み、この杭を使用しながらトレッジを設定した。遺構の確認確率を高めるため、地形の起伏やこれまで検出された遺構の位置関係などを考慮した。また、遺構が検出され、周辺に遺構が存在すると考えられる地点については拡張し、遺構

の分布状況を把握するように努めた。

表土については重機で除去、Ⅱ層以下については人力による分層発掘とし、極力上面で遺構を確認するようにした。

検出された遺構については遺構ごと・発見順に番号を付したが、精査途中で遺構と認定できなかったものについては欠番とした。

遺構の実測図作成は、簡易遺り方測量により縮尺1/10、1/20で図化した。

遺物の取り上げに際しては、出土地点・出土レベル・層位等を記録した。

写真は、一眼レフカメラとデジタルカメラを使用し、調査の経過や遺構・遺物の確認状況等を記録した。

4 調査経過

大湯環状列石第24次発掘調査は、平成19年7月17日より開始し、1,300m²の調査を終了したのは11月22日であった。以下、調査日誌に基づき調査経過の概要を述べる。

7月5日、6日に第1回大湯環状列石環境整備検討委員会が開催され、調査計画についてご指導をいただいた。

7月17日、グリッド設定を開始する。7月24日、調査作業員に調査の目的・方法を説明し、事務連絡を行った後、重機による表土除去が完了した東側のトレンチから掘り下げを開始した。Ⅱ層以下を層位ごとに掘り下げ、各層上面での遺構確認を行なった。

翌25日には博物館実習生が発掘調査現場での実習として調査に参加し、作業員とともに汗を流した。遺構の有無を確認しながら順次掘り進めていくが、遺構は確認されず、遺物も極めて少ない。7月は天候に恵まれたが、暑い日が続く。

8月3日には教職員10年研修で2名、7日には夏休み中の職場体験で鹿角市立十和田中学校の生徒3名が発掘作業に参加した。

8月3日、調査区南側のトレンチで第1号配石遺構の一部を確認する。記録し、精査を進める。その後、調査は調査区北部へと移り、8月23日には第2号配石遺構を検出す。第2号配石遺構は野中堂配石遺構群の近くであることから、周辺を拡張し調査を進める。

9月に入ると天候が不順となり、作業が思うように進まなくなる。第2号配石遺構が検出されて以降、遺構は確認されず、トレンチ設定場所の見直しを行う。第1号配石遺構・第2号配石遺構の確認された位置と野中堂配石遺構群の位置とを考慮し、調査区中央部にトレンチを設定するとともに、第2号配石遺構と野中堂配石遺構群との間に新たな配石遺構が存在する可能性も考慮し、調査区北端側にもトレンチを設定する。

9月25日、調査区中央部において第3号配石遺構の一部を確認する。遺構は調査区内を東西

に走る農業用砂利道の下へと続いていたが、配石遺構の石組の中に砂利が詰まっている状態であったため、少しずつ手作業で砂利を取り除くという気の遠くなるような作業となった。第3号配石遺構の砂利除去作業中であった翌26日には、鹿角市立大湯小学校の校外学習や市内小中学校初任者研修などで多数の見学者があり、砂利の下から現れる配石遺構と、ひとつひとつ砂利を取り除くという根気のいる作業を熱心に見学していた。砂利道の下敷きになっていたにもかかわらず、第3号配石遺構の石組の状況は良好であった。

第1号・第2号・第3号の配置状況から、野中堂配石遺構群から直線状に配石遺構が配置される可能性が考えられることから、調査区中央部においてそれまで土置場となっていた部分にトレンチを入れてみることにする。

10月16日、調査区中央部において配石列を確認する。

11月に入り、朝夕の気温が下がる中、遺構の記録・精査・遺物の取り上げ作業を行う。また、重機での埋め戻しが不可能な部分について人力による埋め戻し作業を行う。

11月22日、現場でのすべての作業を終了し、現場を撤収した。

1月21日、22日には第2回大湯環状列石環境整備検討委員会が開催され、検出された配石遺構などについて報告を行うとともに、今後の進め方についてご指導をいただいた。

なお、1月26日、27日には北秋田市で開催された秋田県埋蔵文化財センター主催の「平成19年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会」で調査成果を報告したほか、2月10日に行われた大湯ストーンサークル館事業「縄文に学ぶ」において調査成果を発表した。

第2表 発掘調査の経過と成果(1)

調査 年度	発掘実施地名	調査面積 (m ²)	調査の成果	収録報告書
昭和 59年	史跡北東部A1区	1,825	配石遺構9基を検出した。配石下に土坑が伴うことが判明、石材の選出地を同定	『大湯遺跡石周辺遺跡発掘調査報告書(1)』1986年3月
60	史跡北東部A2区 野中當北側隣接地B1区	1,870	A2区にA1で新たに15基の配石を検出、うち2基の配石下部土坑よりカメ状土器出土	『大湯遺跡石周辺遺跡発掘調査報告書(2)』1986年3月
61	史跡北東部A3区 万葉東B1区	2,947	A3区より新たに19基の配石を検出、計43基となり、これらが二重の環状に配置されていることが判明した	『大湯遺跡石周辺遺跡発掘調査報告書(3)』1987年3月
62	万葉北西側隣接地D1区 史跡北東部B1区	2,947	D1区より既に柱建物跡10棟、落石遺構3基、T字式の獨立柱建物跡1棟を検出。円石周辺には規則的に遺構が分布することが判明した。	『大湯遺跡石周辺遺跡発掘調査報告書(4)』1988年3月
63	万葉西側隣接地D2区	1,576	獨立柱建物跡11棟、フラスコ状土坑26基を検出。円石周辺には規則的に遺構が分布することが反証した。	『大湯遺跡石周辺遺跡発掘調査報告書(5)』1989年3月
平成 元年	史跡北東部B1区 万葉北東部B2区	1,648	F1区より初期前庭の廻穴式廻転4棟、獨立柱建物4棟を検出する。	『大湯遺跡石周辺遺跡発掘調査報告書(6)』1990年3月
2	万葉北東部B3区	2,810	廻穴式廻転1棟、Tピット墓、フラスコ状土坑群を検出する。	『大湯遺跡石周辺遺跡報告書(7)』1991年3月
3	万葉南C2区	1,519	昭和38年・39年に河原町斎平氏によって紹介されていた配石構築を検出する。	『大湯遺跡石周辺遺跡報告書(8)』1992年3月
4	万葉南B2区 万葉北西側D3区	2,786	F1区で獨立柱建物跡3基を検出。万葉北西側に島状の圓石遺構が広範囲に分布することが判明した。	『特別史跡大湯遺跡石周辺調査報告書(9)』1993年3月
5	万葉北西側隣接地 (D3区・D4区)	3,180	獨立柱建物跡、石列(北側山入口)を検出する。円石周辺地に沿って遺構が広がっていることが予想された。	『特別史跡大湯遺跡石周辺調査報告書(10)』1994年3月
6	万葉東B側隣接地D6区 史跡の北東側(定地外)	2,656 1,520	獨立柱建物跡、石列(東側山出入口)を検出する。円石周辺地に沿って遺構が広がっていることが予想された。 出土管理センター棟前に伴う発掘調査。土坑3基、Tピット2基を検出した。定地外にも遺構が広がることが確認された。	『特別史跡大湯遺跡石周辺調査報告書(11)』1995年3月 『出土文化財管理センター棟設営に伴う発掘調査報告書』 1995年3月
7	万葉南東側隣接地D7区	3,176	獨立柱建物跡、フラスコ状土坑などを検出する。円石周辺地に沿って遺構が広がっていることが決定的となった。	『特別史跡大湯遺跡石周辺調査報告書(12)』1996年3月
8	万葉北西側P4区	3,838	弧状に配置された獨立柱建物跡、大規模な環状の圓石遺構を検出する。	『特別史跡大湯遺跡石周辺調査報告書(13)』1997年3月
9	史跡北端P5区	3,410	円石と関連のある遺構の広がり(北端部)を検出する。円石周辺基5基を検出する。	『特別史跡大湯遺跡石周辺調査報告書(14)』1998年3月
10	万葉南側隣接地D8区 万葉南側Q2区 万葉北西端P6区	4,503	D8区より獨立柱建物跡、フラスコ状土坑等を検出する。独立柱建地に沿って遺構が広がっていることが決定的となつた。	『特別史跡大湯遺跡石周辺調査報告書(15)』1999年3月

第3表 発掘調査の経過と成果(2)

調査 年度	発掘調査地点	調査面積 (m ²)	調査の成果	収録報告書
平成 11	万座瀬状列石(B1 区 野中堂西側(B2 区)	3,910	万座の内側と外側の空白部にも配石遺構が存在することが判明した。	『特別史跡大瀬状列石 発掘調査報告書(16)』2000 年3月
12	野中堂南西側隣接地(B2 区)	2,745	獨立建物跡、フラスコ状土坑等多数の遺構を検出した。万座瀬状列石と同じ遺構分布状況を示すことが判明した。	『特別史跡大瀬状列石 発掘調査報告書(17)』2001 年3月
	史跡北東側(指定地外)	931	フランコ状土坑を検出する。指定地外にも遺構が広がることが確認された。	『復元体験学習館建設事業 に伴う発掘調査報告書』 2001年3月
13	野中堂南側隣接地(B3 区 野中堂南側(B4 区)	663	瀬状列石と同時期の住居跡を検出する。野中堂南側において配石遺構群、石列を検出する。	『特別史跡大瀬状列石 発掘調査報告書(18)』2002 年3月
14	万座西側台地縁(D9 区 万座南西側(G3 区)	1,545	D9 区台地縁より列石と関連の強い穴住居跡 8 基を検出する。	『特別史跡大瀬状列石 発掘調査報告書(19)』2003 年3月
15	万座西側合毛線 (G4 区)	1,485	D9 区で確認された住居跡の南側の広がりを確認した。等間隔に並んだ柱列 2 本を検出した。	『特別史跡大瀬状列石 発掘調査報告書(20)』2004 年3月
16	史跡西端	770	瀬状列石から離れるに従って遺構分布が薄くなること が判明	『特別史跡大瀬状列石 発掘調査報告書(21)』2005 年3月
17	史跡北東側 (A4 区・A5 区)	1,646.79	一本木後ロ配石遺構群の西側の広がりを確認。また、古代の道、近世の沿陥便道を確認する。	『特別史跡大瀬状列石 発掘調査報告書(22)』2006 年3月
18	史跡北東側 (A6 区・A7 区)	1,340	一本木後ロ配石遺構群の東側の広がりを確認。並列を描くことが判明した。	『特別史跡大瀬状列石 発掘調査報告書(23)』2007 年3月
19	史跡南側 (H1 区)	1,300	野中堂瀬状列石の南側にも列石と関連の強い配石遺構や配石列が分布することが判明。	『特別史跡大瀬状列石 発掘調査報告書(24)』2008 年3月
20	史跡南側 (H2 区)			

第Ⅲ章 発掘調査と環境整備

1 発掘調査と研究

大湯環状列石は、大正時代の後半から行なわれた耕地整理に伴い「野中堂環状列石の一部」が昭和6年に発見された。同年12月に刊行された『秋田考古会誌』第2巻第5号に、当時の秋田県史蹟調査員であった武藤一郎氏「鹿角郡大湯町に於ける遺跡の研究」と題する報告がある。発見については昭和7年説を唱える地元研究者もいるが、昭和26年に文化財保護委員会が発掘調査した際、その主任担当官であった斎藤忠氏は発見の経緯について聞き取り調査を行い、昭和6年発見という確証を得て『大湯町環状列石』に記載している。

発見以後、東北帝国大学喜田貞吉氏、県史蹟調査員深沢多市らが史跡の調査に訪れるが、ほとんど発掘調査は行なっておらず、大規模な発掘調査は昭和17年の「神代文化研究所」によるものである。この研究所は小寺小次郎、田多井四郎治などによって設立された団体であり『上記（うえつふみ）』や『武内文献』を根底に据えて超国家主義の考え方を展開した。この研究所が実施した発掘調査は考古学的な研究を目的としたものではなく、当時の世相を反映した「皇國史觀」的なものであったが、二つの環状列石のほぼ全容を明らかにした。この研究所がどのような調査報告をしたのか資料がなく明らかとなっていないが、この調査に参加した吉田嵩夫氏（考古部門を担当）はその後『神代文化』第47号に「環状列石遺跡の標式的形式を具備」と題して「環状列石は単に輪状と石を環状に置いているものでないこと、円形や方形に石を配置（これを石囲と呼んでいる）している」と発表した。

その後、昭和21年から23年頃には甲野勇氏が精力的に現地視察を、21年には後藤守一氏、江坂輝彌氏とともに秋田県教育委員会・朝日新聞社の援助のもとに発掘調査を行い、その時の様子を『科学朝日第7巻第11号』に「ストーン・サークル 秋田県大湯町石器時代遺跡」としてまとめていている。

昭和25年に文化財保護法が制定され、その対象として埋蔵文化財も含まれることになり、また、その法規定により文化財保護委員会が必要に応じ、直接発掘調査を実施できるようになった。第1回の愛知県吉胡貝塚、それに引き続き大湯環状列石が昭和26年・27年にわたり発掘調査（所謂 国営調査）が実施された。

文化財保護委員会は斎藤忠氏、八幡一郎氏を調査担当者に、大場磐雄氏（神道考古学）、甲野勇氏・後藤守一氏（考古学）、長谷部言人氏（人類学）、藤岡一男氏（地質学）などの各分野の専門家を調査員に迎え調査を開始した。この調査の目的は「環状列石の時代及び性格を明らかにすると共に近年移動された形跡が明らかなものについては復旧の工事をなし、保存の万全を期す」ことであった。昭和26年には八幡氏・後藤氏が中心となり環状列石の実測図を作成し、この成

果をもとに後藤氏は環状列石を構成する配石遺構を「九形式五種」に分類した。さらに、27年には環状列石を構成する配石遺構の中より14基を抽出し、配石下の調査を実施している。そのうち11基からは配石下に屈葬遺体を埋葬できるほどの土坑が検出され、土坑内の土壤の層分析を行ったところ一例であるが高い濃度を示すものがあった。このような状況から調査を終括した斎藤氏は、環状列石は墓の集合体である「墓城」の可能性が高いものとし「墳墓説」を提示した。しかし、配石下に土坑が伴わない例が存在すること、人骨・副葬品が出土しないこと、層濃度が高いのが一例であったことから「祭祀場説」を否定するまでには至らなかった。この調査の際、野中堂環状列石の「日時計状組石」の下部の調査も検討されていたようであるが、後世に残すという考えから調査は行なっていない。当時の調査の様子については、平成17年に斎藤氏が大湯ストーンサークル館で行なわれた講演でそのエピソードを紹介している。

昭和31年に、考古学以外の分野から環状列石解明のアプローチが川口重一氏によってなされた。川口氏は『大湯町環状列石』に収録された実測図から「古代人の方位に関する知識」を探ろうとしたもので、その成果は『若木考古第41卷』に「大湯町環状列石の配置の意義」として収められている。川口氏が示した図は二つの環状列石の中心と各々の環状列石に所在する日時計状組石が直線的に並んだもので、この直線が西から北へ33度ズレたもので「夏至の日没方位を指す」としている。この川口氏の説については平成6年、地元研究者である安村二郎氏が着目し「大湯環状列石の一考察(下)」と題して『秋田魁新聞』の夕刊に紹介した。この川口氏の考えは、地元出身の阿部義平氏から小林達雄氏に伝えられ、小林氏によって「縄文ランドスケープ」として遺跡の解明手段として展開されていく。

国営調査以後、環状列石が学会や論文に取り上げられる機会が少なくなったが、昭和43年、水野正好氏が『信濃第20巻第50号』において「環状組石墓群の意味するもの」として環状列石の性格に迫った。水野氏は万座・野中堂環状列石に検討を加え「外帯を二分した組石墓にみられる集中度の相違は、仔細に検討すれば、組石墓が数基から十数基が集塊して一塊を作り、そうした群が十二塊、環状に配されて外帯を構成し」と述べ、与助尾根遺跡で認められた集落構成から二つの小塊で一つの小群を、さらに三つの小群によって大群をつくり、この二つの大群により環状列石が構成されているとした。

昭和45年9月には鹿角郡大湯町(現、鹿角市大湯)のホテルを会場(シンポジウム会場はこれまでホテルを開催されたとされているが、この会に実際に参加された方より旧十和田町大湯支所であったとの指摘を受けた)に「縄文時代の配石遺構」をテーマに北奥古代文化研究会が開催された。この会ではそれまで蓄積された配石遺構の事例が紹介されたほか、この席上で斎藤氏は「墳墓説」、江坂氏は「祭祀場説」を再度強調した。結局、この席上でも配石遺構・環状列石の性格を決定することができず、この両説が昭和59年の大湯環状列石の一本木

後口配石群の調査まで並存した。

昭和40年代に入ると高度成長期と相俟って史跡周辺にも開発が及ぶようになった。また、農業機械の大型化が進み、遺跡の保存が危惧されるようになった。

このような状況から、昭和48年秋田県・鹿角市教育委員会により「緊急分布調査」が、翌年から51年には「詳細分布調査」が行なわれた。この調査によって野中堂環状列石の東側約250mの地域に配石遺構群（現一本木後口配石遺構群）、万座環状列石西側配石遺構が発見され、万座・野中堂環状列石と直接的・間接的に関連する遺構や遺物が列石を中心に東西約800m、南北約400mの広範囲に分布することが判明した。

鹿角市教育委員会では、昭和48年～51年の調査を受けて、昭和53年に『特別史跡大湯環状列石保存管理計画書』を策定し、これを具体化するために昭和59年度から「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査」を開始した。平成2年には周辺遺跡のほとんどが特別史跡に追加指定されたことから「大湯環状列石発掘調査」として、平成4年からは史跡の環境整備基本計画を策定するため『特別史跡大湯環状列石発掘調査』と改称し、現在も調査を継続している。各年次の成果については各報告書に収録されているが、一本木後口配石遺構群の調査によって配石下には埋葬施設をもち、この結果より環状列石が配石墓（組石墓）の集合体であること、万座・野中堂環状列石を中心に掘立柱建物、土坑・貯蔵穴、遺物廻棄域が同心円状に規則的に配置されたことが判明した。この同心円構造の判明は北秋田市・伊勢堂岱遺跡の環状列石Cの発見の契機となった。

これまでの調査成果については年次毎に発行した『報告書』に収めているとともに、平成16年3月に発行した『特別史跡 大湯環状列石（I）遺構編』にまとめている。

昭和59年には、秋田県北部地域の埋蔵文化財の研究・保護、並びに埋蔵文化財に対する意識向上に寄与するため「よねしろ考古学研究会」が設立され、機関紙である「よねしろ考古」には多くの大湯環状列石や配石遺構の論文が収められている。

平成6年、遺跡の解明手法として小林達雄氏は「縄文ランドスケープ」を提唱した。これは遺跡の多くが二至二分を基本として當まれていてこと、環状列石のような記念物（モニュメント）は山並みや天体のなかに組み込まれ、ひとつの景観・空間を作り出しているというもので、これを手がかりに遺跡の本質に迫ろうとした。

平成9年10月には、秋田市を会場に日本考古学協会1997年秋田大会が開催された。「縄文時代の集落と環状列石」をテーマに、北海道や北東北で発見された「環状列石の実態」について報告され、集大成されている。

遺跡の保存と保護、性格解明と環境整備事業のための基礎資料収集を目的に進められてきた発掘調査も、次年度の第25次調査を迎える。

今、新たに「環状列石を作り上げた人々のムラ」、「環状列石を囲んで行なわれた祈りとマツリ」、「配石遺構の形態の違いと環状列石の並存理由」など多くの課題解決を図っていくかなければならない。

大湯縄文人が環状列石を作り上げ、後世に何を伝えようとしたのか。発掘調査で得られた膨大な資料を整理し、遺跡に立ち大湯縄文人の心を感じながら、日本文化の原点である縄文文化を現代に生きる人々に伝えていくという命題が今まさに与えられた。

2 遺跡の保存、史跡指定と公有化事業

遺跡の発見から2年後(昭和8年)に、諫訪富多氏・高木新助氏・浅井小魚氏らによって遺跡の保存を主な目的に「大湯郷土研究会」が発足した。同会は昭和12年5月23日、野中堂環状列石北西側隣接地(平成14年に史跡外に移設)に「此石標の南北二箇所に埋没する環状石群の発見は昭和七年極月耕地整理に其の端を得且此地一帯は諸種遺物の豊富なる包含地なるが故にこの種文化将来の開明を期し暫く発掘を停止して此の秘蔵を封じ置くもの也、昭和十二年五月」と刻んだ石碑(碑銘「先住民 中通遺跡」)を建立し、遺跡の保存の必要性を説いた。

昭和25年6月30日、秋田県教育委員会によって主要部分の9,477m²が史跡に仮指定され、翌年12月26日には「大湯町環状列石」として環状列石の周辺を含む16,182m²が国史跡として指定された。また、昭和31年7月19日には26年・27年の文化財保護委員会による発掘調査(所謂国営調査)を経て「特別史跡」に指定されている。

昭和40年後半に入ると高度成長期とともに開発の手がこの台地にも及ぶ恐れがあったことから昭和48年～51年にかけて秋田県教育委員会・鹿角市教育委員会によって環状列石周辺において分布調査が実施された。その結果、環状列石と直接的又は間接的に関連する遺構が広く分布し、その範囲は環状列石を含む約30万m²であることが判明した。

鹿角市ではこの結果を受け、昭和53年「特別史跡 大湯環状列石保存管理計画書」を策定し、遺跡の保存・整備・活用の指針を示し、土地所有者への史跡追加指定申請に向けて同意交渉を開始した。同意交渉とともに昭和59年度より開始した発掘調査により、土地所有者の遺跡保護の意識も高まり、平成2年、6年、13年に追加指定を行い、その指定面積は249,833.60m²となっている。

追加指定地の公有化については平成3年度から13年度にかけて国・県の補助を得て実施し、県道・赤道・一部の民有地を除く史跡全体の約90.5%が公有化され、保存・活用されている。

なお、詳細な内容については「特別史跡 大湯環状列石(I)」を参照されたい。

3 環境整備

鹿角市では「史跡の追加指定と民有地の公有化・発掘調査による遺跡の解明・遺構の復元と資料館の建設」を柱とする『特別史跡 大湯環状列石保存管理計画書』を昭和53年に策定し、施設の活用と整備基本指針を示した。

これを具体化していくため、文化庁・秋田県の補助を得て昭和59年度より「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査」を、さらに平成2年度から「大湯環状列石発掘調査」に名称を改め発掘調査を継続している。

平成7年9月には、埋蔵文化財の収藏と管理を目的に文化庁・秋田県の補助を得て、史跡北側の指定地外隣接地に「鹿角市出土文化財管理センター」を開館し、調査・研究の拠点とした。

鹿角市教育委員会では『管理計画書』に掲げた「遺構の復元と資料館の建設（史跡の環境整備）」を具体化していくため、平成元年度に「特別史跡大湯環状列石環境整備事業検討委員会」を設置し、協議・検討を進め、環境整備に係わる「構想の基本理念・構想の指針・整備の前提条件」を『特別史跡大湯環状列石環境整備基本構想』として平成4年にまとめ上げた。

平成7年には『基本構想』を具体的なものにするため「整備のテーマと基本方針・短期計画内容の策定・活用計画』をまとめた『環境整備基本計画』を策定し、さらに8年・9年度の二ヵ年を費やして万座・野中堂環状列石を中心とした整備基本方針と復元遺構の摘出と復元方法、ガイダンス施設（現 大湯ストーンサークル館）の目的・機能・活用などの検討を行い、平成10年3月に『環境整備基本計画説明書』を作成し、事業開始の前提条件を整えた。

環境整備事業は平成10年度の文化庁「地方拠点史跡等総合整備事業」に採択され、第Ⅰ期環境整備事業が開始された。なお、環境整備を進めるにあたって史跡が余りにも広大であることから環境整備は第Ⅰ期～Ⅳ期（各5ヵ年）に分けて実施することにした。

環境整備理念として「史跡の保護と保存・史跡を取り巻く景観の重視」を掲げ、これまでに策定した『基本構想』や『基本計画』の趣旨を厳守した。

なお、第Ⅰ期環境整備並びに第Ⅱ期環境整備に実施した内容は下記のとおりである。

(1) 第Ⅰ期環境整備

① 環状列石の復元

露出展示を継続していくため、石が転倒または移動したものについては『大湯町環状列石』報告書に掲載されている実測図、写真と照らし合わせて、国営調査時の状況に復元した。

② 掘立柱建物跡の復元

環状列石との関連が強い掘立柱建物跡の復元を行った。万座環状列石隣接部からは51棟の4本・6本柱建物跡が検出されていたことから、この中で環状列石の完成期に同時に存在していたものと考えられる建物跡を抽出し12棟を復元対象とした。また、万座環状列石北西側台地縁で検出された5本柱建物跡も史跡の性格・特異性を理解するうえで欠かすことができない遺構であることから復元対象とした。

なお、野中堂環状列石隣接地にも建物跡が存在することが明らかとなっていたが、同列石の北側については埋蔵された状況をそのまま保存する目的のため調査を行わないことにしており、建物跡の配置などが不明であったことから同列石での建物跡の復元は行わなかった。

③ 配石遺構の復元

配石遺構は史跡の特徴を表す遺構であることから復元した。環状列石の露出展示継続のため万座環状列石に極めて近い配石遺構（環状配石遺構・配石列など）については保存処理を行なって露出展示としたが、それ以外の配石遺構については実物と同様の自然石を用い復元した。

④ 地形の復元

発掘調査の成果をもとに環状列石構築当時の地表面の等高線を作成し、遺構の保存に支障のない範囲で土の漉き取り（一部盛り土）を行い、地形を復元した。なお、遺構保存層は50cmとした。

⑤ 植栽

史跡を取り囲んでいたと思われる森を復元するため、花粉分析結果や出土炭化堅果類、史跡周辺の自然植生を参考に、ツルもの・低木・中木・高木22種2,396本を植栽した

また、貼芝は環状列石周辺と北側広場のみとし、その他は野草とした。

植栽・芝の管理が行き届くことによって、万座環状列石内には絶滅危惧種となっている「おきな草」が自生、管理の行き届いた芝地には「ネジ花」が群生し、見学者の目を楽しませている。

⑥ 石材の保存処理

発見以来、約70年余の歳月が経過し、石は黒ずみ、劣化が見られるようになった。

鹿角市教育委員会では、環境整備の根幹として二つの環状列石について現物展示を継続していくための原因究明と保存方法を探った。

3 環境整備

鹿角市では「史跡の追加指定と民有地の公有化・発掘調査による遺跡の解明・遺構の復元と資料館の建設」を柱とする『特別史跡 大湯環状列石保存管理計画書』を昭和53年に策定し、施設の活用と整備基本指針を示した。

これを具体化していくため、文化庁・秋田県の補助を得て昭和59年度より「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査」を、さらに平成2年度から「大湯環状列石発掘調査」に名称を改め発掘調査を継続している。

平成7年9月には、埋蔵文化財の収蔵と管理を目的に文化庁・秋田県の補助を得て、史跡北側の指定地外隣接地に「鹿角市出土文化財管理センター」を開館し、調査・研究の拠点とした。

鹿角市教育委員会では『管理計画書』に掲げた「遺構の復元と資料館の建設（史跡の環境整備）」を具体化していくため、平成元年度に「特別史跡大湯環状列石環境整備事業検討委員会」を設置し、協議・検討を進め、環境整備に係わる「構想の基本理念・構想の指針・整備の前提条件」を『特別史跡大湯環状列石環境整備基本構想』として平成4年にまとめ上げた。

平成7年には『基本構想』を具体的なものにするため「整備のテーマと基本方針・短期計画内容の策定・活用計画』をまとめた『環境整備基本計画』を策定し、さらに8年・9年度の二ヵ年を費やして万座・野中堂環状列石を中心とした整備基本方針と復元遺構の摘出と復元方法、ガイダンス施設（現 大湯ストーンサークル館）の目的・機能・活用などの検討を行い、平成10年3月に『環境整備基本計画説明書』を作成し、事業開始の前提条件を整えた。

環境整備事業は平成10年度の文化庁「地方拠点史跡等総合整備事業」に採択され、第Ⅰ期環境整備事業が開始された。なお、環境整備を進めるにあたって史跡が余りにも広大であることから環境整備は第Ⅰ期～Ⅳ期（各5ヵ年）に分けて実施することにした。

環境整備理念として「史跡の保護と保存・史跡を取り巻く景観の重視」を掲げ、これまでに策定した『基本構想』や『基本計画』の趣旨を厳守した。

なお、第Ⅰ期環境整備並びに第Ⅱ期環境整備に実施した内容は下記のとおりである。

(1) 第Ⅰ期環境整備

① 環状列石の復元

露出展示を継続していくため、石が転倒または移動したものについては『大湯町環状列石』報告書に掲載されている実測図、写真と照らし合わせて、国営調査時の状況に復元した。

・強化、撥水、防カビ処理

石材本体の強化、再度のカビや藻などの付着を防止するため次の薬品を塗布した。強化・撥水剤として珪酸エステル系強化剤とシラン系撥水剤を組み合わせたものを使用した。防カビ・防藻剤として事前の試験結果から環状窒素イオウ化合物とヒドラジン系化合物であるC R Hを使用した。

塗布に際しては、強化剤に防カビ剤を適量添加・混合し、効率よく含浸させるため刷毛を使用して数度塗布した。1回目は薬剤が石材の表面に浮く程度に浸透させ、1時間～1時間半ほど乾燥させ、必要に応じて塗布を追加した。

石材保存処理を施し5年を経過した。薬品の効果並びに再度の黒ずみ発生を観察するため、各環状列石から定点観察用の石を選び出し、観察カルテを作成している。

⑦ 利便・管理施設

史跡内に設置した利便・管理施設は史跡の景観を損なわないように必要最小限とした。

園路の素材として薄緑色の洗出平板をしたが、平板間に芝を入れ、園路そのものが目立たないよう配慮した。

⑧ (仮称) 体験学習館の建設

史跡見学者へのガイダンス、体験学習を中心とした活用拠点、史跡の管理施設の拠点として(仮称)体験学習館(現 大湯ストーンサークル館)を建設した。

完成した大湯ストーンサークル館は史跡との景観を考慮した木造平屋建てとし、延床面積は1,164.43m²である。館内には展示ホール、縄文工房(体験学習室)、万座ホール(講座・講演)などがあり、館外には縄文広場(イベント会場)や展示広場などが付設されている。

現在、史跡並びに館展示については史跡案内ボランティアが主体となり方言を交えた解説を行なっている。また、館事業として体験学習(土器・土製品・ペンダント作り)や観察会(天体観察会・草花撮影会)のほか、縄文文化や環状列石に関連した講座・講演「縄文に学ぶ」を行っている。

(2) 第Ⅱ期環境整備

① 柱列復元

環状列石と関連が強い柱列の復元を行なった。柱列は三本一列が一単位となるもので2条復元した。

② 地形復元

万座震状列石に近い地域については、発掘調査で得られた情報から縄文当時の等高線を作成し、地形の復元を行なった。遺構構築面や当時の地表面を保護するため50cmの保護層とした。また、整備対象地区の西側については現状のままでし、畠境に生じた凹凸を無くす程度に地均した。

③ 植栽

史跡を取り囲んでいたと思われる森を復元するため、花粉分析結果や出土炭化堅果類、史跡周辺の自然植生を参考に、ツルもの・低木・中木・高木25種1,129本を植栽した。

また、一部に芝を貼った。

④ 利便・管理施設

史跡西側を周回する園路、雨水処理のための浸透井、転落防止の木柵、見学時の休憩用として木製ベンチを設置した。園路はパーク敷きのものとし史跡の景観を考慮した。

第4表 特別史跡大湯環状列石墳墳整備の経緯 (1)

昭和 53 年度：「大湯環状列石墳墳整備計画書」策定
平成 4 年度：「特別史跡大湯環状列石墳墳整備基本構造」策定

整備年 対象地	第 I 大湯環状列石墳			第 II 大湯環状列石墳			第 III 大湯環状列石墳			第 IV 大湯環状列石墳		
	実施計画 概要	基本計画 実施設計	地形 測量	実施計画 調査	基本計画 実施設計	地形 測量	実施計画 調査	基本計画 実施設計	地形 測量	実施計画 調査	基本計画 実施設計	地形 測量
昭和 59 年度								A1 区				
60 年度	B1 区							A2 区				
61 年度	C1 区							A3 区				
62 年度	D1 区											
63 年度	E1 区											
平成元年度	F1 区											
2 年度	F2 区											
3 年度	G2 区											
4 年度	F3 区											
5 年度	D5 区											
6 年度	D6 区											
7 年度	D7 区											
8 年度	F4 区											
9 年度	F5 区											

第5表 特別史跡大湯環状列石遺跡整備の経緯(2)

整備 実施 年 度	対象	第Ⅰ期調査実績			第Ⅱ期調査実績			第Ⅲ期調査実績			第Ⅳ期調査実績		
		実施年	基本計画 実施設計 調査	地形 測量	主な構 造物	実施年	測量	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査
10 年度	万 座	10年、 G2区、 P6区	実施設計 実施設計 調査	地形 測量	主な構 造物	実施年	測量	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査
11 年度	野 中 東	10年、 E8区	実施設計 実施設計 調査	地形 測量	主な構 造物	実施年	測量	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査
12 年度	東 北	10年、 E2区	実施設計 実施設計 調査	地形 測量	主な構 造物	実施年	測量	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査
13 年度	石 と そ	10年、 E3区、 P4区	実施設計 実施設計 調査	地形 測量	主な構 造物	実施年	測量	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査
14 年度	西 辺	10年、 E4区	実施設計 実施設計 調査	地形 測量	主な構 造物	実施年	測量	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査
15 年度	南 度	10年、 E5区	実施設計 実施設計 調査	地形 測量	主な構 造物	実施年	測量	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査
16 年度	史 跡	10年、 E6区	実施設計 実施設計 調査	地形 測量	主な構 造物	実施年	測量	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査
17 年度	西 側	10年、 E7区	実施設計 実施設計 調査	地形 測量	主な構 造物	実施年	測量	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査
18 年度	東 側	10年、 E8区	実施設計 実施設計 調査	地形 測量	主な構 造物	実施年	測量	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査
19 年度	南 度	10年、 E9区	実施設計 実施設計 調査	地形 測量	主な構 造物	実施年	測量	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査	地形 測量	主な計画 実施設計 調査

第6表 特別史跡大湯草状列石遺跡整備の経緯 (3)

整備年 度 対象	第1別闇塚地盤				第1別闇塚地盤				第1別闇塚地盤				第1別闇塚地盤				第1別闇塚地盤				第IV別闇塚地盤			
	発掘 調査	基本計画	地形 測量	土方調 査	発掘	基本計画	地形 測量																	
20 年度 対象																								
21 年度 対象																								
22 年度 対象																								
23 年度 対象																								
24 年度 対象																								
25 年度 対象																								
26 年度 対象																								
27 年度 対象																								
28 年度 対象																								
29 年度 対象																								

第7表 環境整備の概要

	年度	整備地区	整備内容	補助事業名 事業費
第一期 環境整備	平成10年度	万座・野中堂壇状 列石及びその周辺	<ul style="list-style-type: none"> ・環境整備工事実施設計 ・地形測量 ・石材保存処理調査 ・環境調査、洗浄剤の開発と洗浄方法、防カビ育成開発、修復と接着調査ほか ・環境整備 ・道幅復元(壇状配石連構、配石列)、地形復元、植栽、園路ほか ・発掘調査 	地方拠点史跡等総合 整備事業 (事業費 180,119千円)
	11年度	万座・野中堂壇状 列石及びその周辺	<ul style="list-style-type: none"> ・環境整備工事実施設計 ・石材保存処理調査 ・石材修復 ・刀座・野中堂壇状列石実測図作成 ・環境整備 振立柱建物復元、配石連構復元、建物柱復元、園路、植栽、排水構、案内板 ・発掘調査 	地方拠点史跡等総合 整備事業 (事業費 180,070千円)
	12年度	史跡指定地外(仮称 体験学習館建設)	<ul style="list-style-type: none"> ・(仮称)体験学習館建設工事実施設計 ・(仮称)体験学習館建設 杭打工、本体工、電気設備工、機械設備工 	地方拠点史跡等総合 整備事業 (事業費 171,089千円)
		万座・野中堂壇状 列石及びその周辺	<ul style="list-style-type: none"> ・環境整備工事実測設計 ・石材保存処理調査 ・環境整備 振立柱建物たたき盛り土、植栽、排水 ・発掘調査 	保存修理事業 (事業費 30,035千円)
	13年度	史跡指定地外(仮称 体験学習館建設)	<ul style="list-style-type: none"> ・(仮称)体験学習館建設工事実施設計 ・(仮称)体験学習館建設 杭打工、本体工、電気設備工、機械設備工 	地方拠点史跡等総合 整備事業 (事業費 240,509千円)
		万座・野中堂壇状 列石及びその周辺	<ul style="list-style-type: none"> ・環境整備工事実施設計 ・環境整備 地形復元、植栽 ・発掘調査 	保存修理事業 (事業費 30,063千円)
	14年度	万座・野中堂壇状 列石及びその周辺	<ul style="list-style-type: none"> ・環境整備工事実施設計 ・石材洗浄並びに保存処理 ・野中堂壇状列石実測図作成 ・環境整備 配石連構復元、地形復元、サイン設置、植栽、園路ほか ・発掘調査 	地方拠点史跡等総合 整備事業 (事業費 200,009千円)
	15年度	史跡西側地区	<ul style="list-style-type: none"> ・第II期環境整備地域の地形測量 ・発掘調査 	保存修理事業 (事業費 21,384千円)
	16年度	史跡西側地区	<ul style="list-style-type: none"> ・第II期整備実施設計 ・発掘調査 	保存修理事業 (事業費 25,209千円)
	17年度	史跡西側地区	<ul style="list-style-type: none"> ・環境整備 地形復元、園路、木橋設置、排水構設置ほか ・発掘調査 	保存修理事業 (事業費 30,628千円)
	18年度	史跡西側地区	<ul style="list-style-type: none"> ・環境整備 柱列復元、植栽 ・発掘調査 	保存修理事業 (事業費 27,443千円)
	19年度	史跡西側地区	<ul style="list-style-type: none"> ・環境整備 植栽 ・発掘調査 	保存修理事業 (事業費 24,850千円)

第IV章 H₁区の検出遺構と出土遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

H₁区において確認された縄文時代の遺構は配石遺構3基、配石列1条、焼土遺構1基である。

(1) 配石遺構

H₁区において3基の配石遺構が検出された。

第1号配石遺構（第9図）

調査区南側、AD-61～62グリッドに位置する。地形確認用のために5m間隔で設置したトレンチにおいて、II層除去中にその一部を確認した。その後掘り下げを行い、III d層面において配石遺構全体を確認した。西側の石の一部に耕作の際に動かされた痕跡がみられたが、石組の状況はおむね良好であった。

配石の形態は、梢円形に石を立て並べ、その内側に扁平な石を置いたものであり、I a類に分類される。配石部の規模は長軸88cm、短軸59cmを測る。配石を構成する石はすべて石英閃綠玢岩であり、大きさは25cm～35cmのものが使用されていて、同じような大きさの石を選んで使用したという印象を受けた。

配石部の記録後、西側半分の石を移動させ、半裁し、下部土坑の確認を行ったところ、長軸推定151cm、短軸105cmの規模を示す梢円形の土坑を検出した。土坑の深さは29cmで、地山面を掘り込んでいる。底面は平坦で、壁面はゆるい立ち上がりをみせている。土坑の長軸方向は、N-92°-Eである。

堆積上は5ブロックに区分され、人為堆積である。1層・4層の状況から、本遺構については、土坑を埋めながら石を組んだのではなく、一度土坑を埋めた後、穴を掘り、石を立てたものと考えられる。

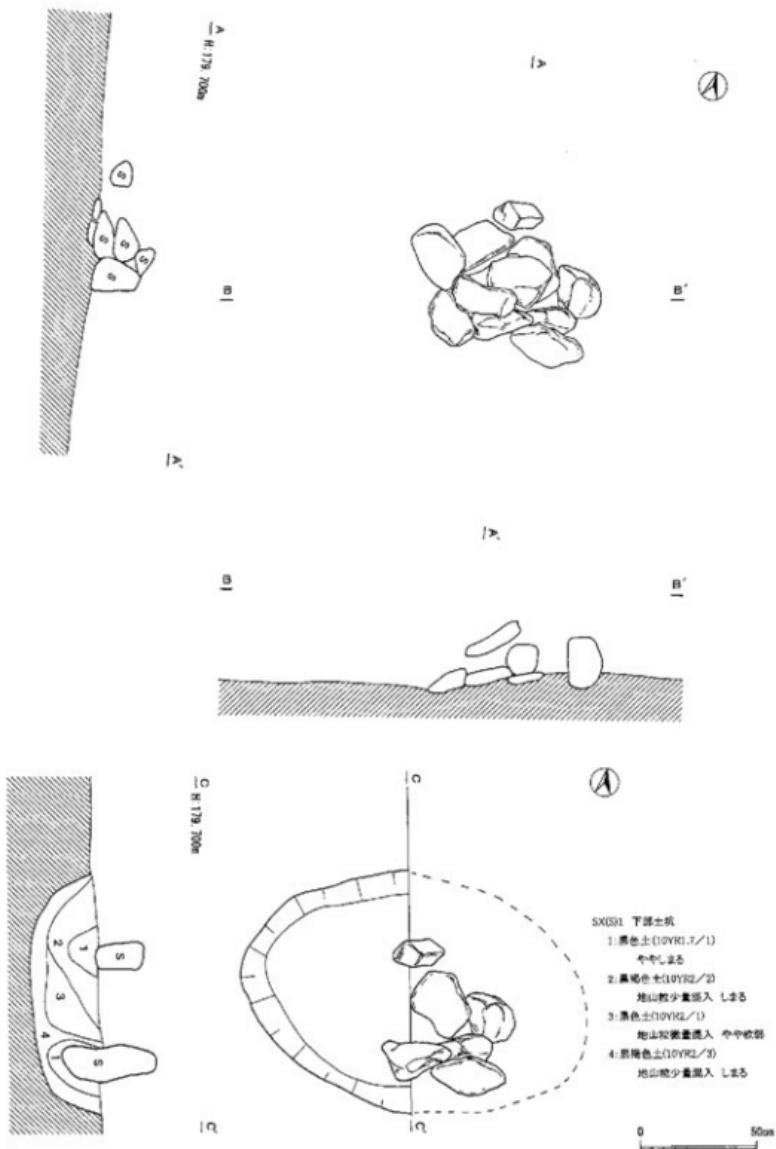
なお、下部土坑精査のために移動した石は、記録後の埋め戻しの際に復元した。

構築時期は、遺構の確認面から縄文時代後期と考えられる。

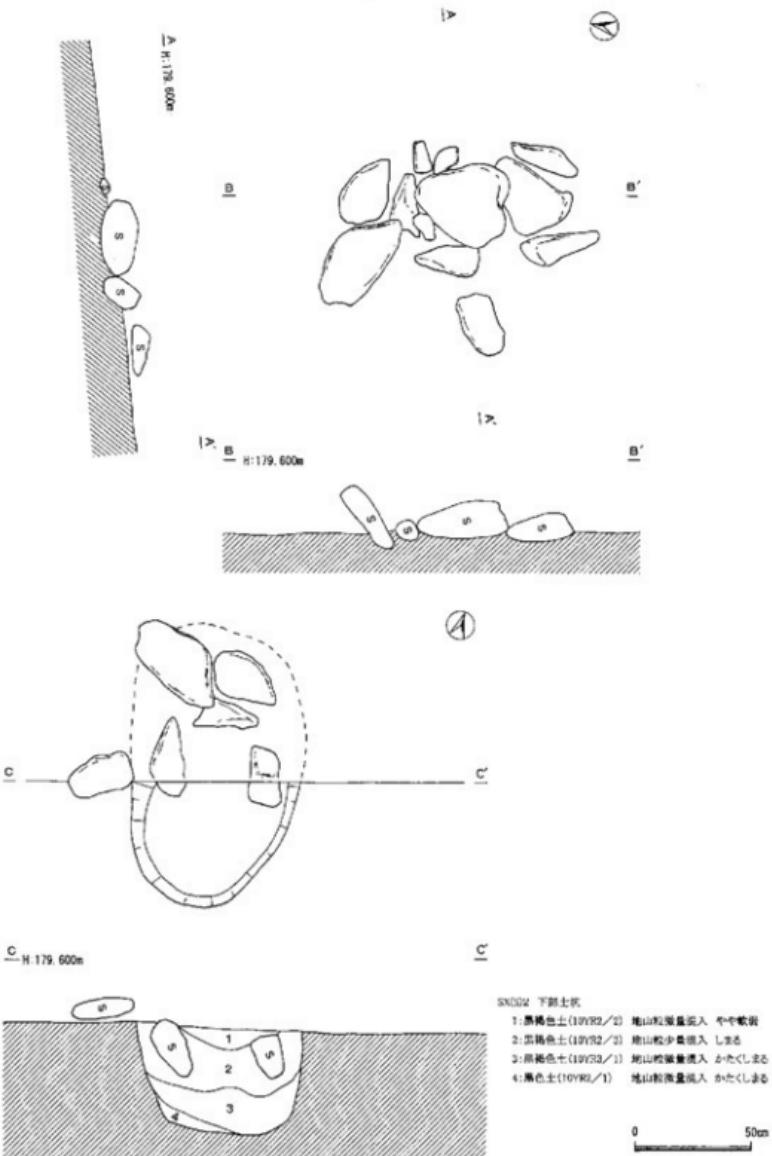
第2号配石遺構（第10図）

調査区北側、AA-71～72グリッドに位置し、III d層面で配石遺構の全体を確認した。

配石の形態は、梢円形に石を立て並べ、その内側に石を置いたものであり、I a類に分類される。配石の規模は長軸101cm、短軸56cmを測る。配石を構成する石はすべて石英閃



第9図 第1号配石遺構実測図



第10図 第2号配石遺構実測図

緑玢岩であり、石の大きさは25cm～50cmのものが使用されている。

配石部の記録後、南側半分の石を移動させ、半裁し、下部土坑の確認を行ったところ、長軸推定122cm、短軸73cmの規模の橢円形の土坑を検出した。土坑の深さは44cmで、わずかに地山を掘り込んでいる。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。土坑の長軸方向は、N-18°-Wである。

堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

なお、下部土坑精査のために移動した石は、記録後の埋め戻しの際に復元した。

構築時期は、遺構の確認面から縄文時代後期と考えられる。

第3号配石遺構（第11図）

調査区南側、A E-63グリッドに位置する。II層除去の際、配石の一部を確認し、その後III d層面において配石遺構の全体を確認した。配石の西側半分は農業用に使われている砂利道の下となっており、砂利がかなり混入していたが、石組の状況はおおむね良好であった。

配石の形態については、橢円形に石を組み、南北両端の石が立石であったとみられることがから、I a類に分類されると考えられる。配石部の規模は、長軸171cm、短軸102cmを測る。配石を構成する石はすべて石英閃緑玢岩であり、石の大きさは30cm～50cmのものが使用されている。

本遺構は砂利道の下におよぶことから、半裁による下部土坑の確認は行わなかった。

配石の長軸方向は、N-2°-Wである。

構築時期は、遺構の確認面から縄文時代後期と考えられる。

② 配石列

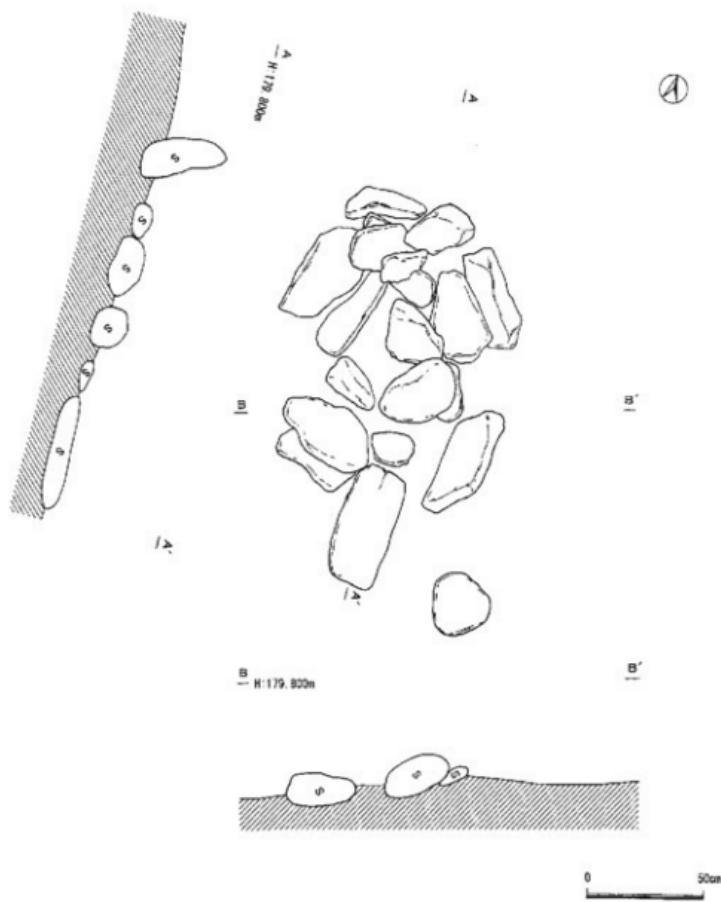
H1区において1条の配石列が検出された。

第1号配石列（第12図）

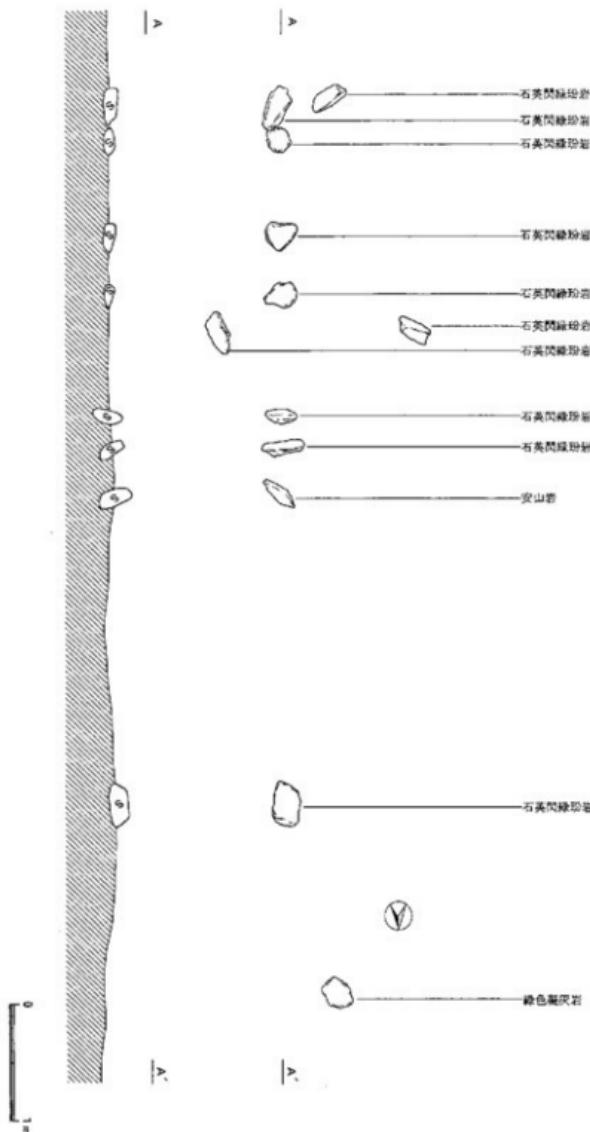
調査区北側、A B-69グリッドに位置し、III d層面で確認した。

20cm～40cmの大きさの川原石が直線状に配置されている。長さは7.97mを測り、南北方向に延びる。石列の構成は、全体的に扁平な石を並べているが、石列中央部の3個の石だけが短軸側を立てた状態で配置されていた。

石列を構築する石材はほとんどが石英閃緑玢岩であったが、安山岩、緑色凝灰岩が1個ずつ含まれていた。



第11図 第3号配石遺構実測図



第12圖 第1號配石列實測圖

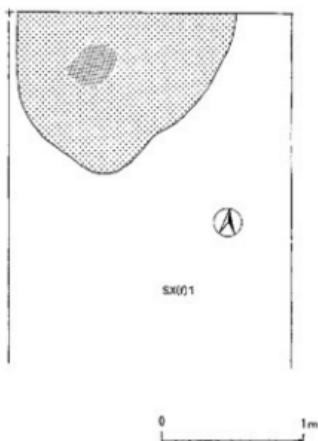
構築時期は、遺構の確認面から縄文時代後期と考えられる。

(3) 焼土遺構

H₁区において1基の焼土遺構が検出された。

第1号焼土遺構（第13図）

調査区北東部、AD-76グリッドに位置し、III d層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は156cm×113cmを測り、焼土は、中央部に位置し26cm×38cmを測る。遺物は出土しなかった。



第13図 第1号焼土遺構実測図

(4) 遺構外出土遺物

H₁区からは、83点の土器破片と20点の石器が出土した。

土器の分類については、時期ごとに群別し、文様や施文技法で分類した。

① 縄文土器

本調査区からは、83点の土器破片が出土した。

後期初頭から前葉の土器

1類：沈線文の土器（第14図1～第16図26）

沈線文のみで文様構成されている土器を一括した。平行沈線のほか、曲線文や「S」字文が施されているものもみられる。24、25は渦巻文が施されている。

焼成は良好で、色調は明褐色やにぶい黄橙色を示す。

これらは、縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられると思われるものを一括した。本類は十腰内I a式に比定される。

後期の土器

1類：無文の土器（第16図27～第17図45）

無文の土器破片を一括した。

焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を示す。

2類：縄文の土器（第17図46～第18図57）

地文のみの土器破片を一括した。深鉢が主体で、単節文が施されている。

焼成は良好で、色調は橙色や明黄褐色を示す。

3類：撚糸文の土器（第18図58～61）

撚糸文が施された土器破片を一括した。短軸絡条体や網目状撚糸文が施されている。

焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色を示す。

4類：条痕文の土器（第18図62）

木目状条痕文が施された土器破片である。

焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色を示す。

縄文時代後期の土器を一括した。本調査区から出土した土器は、小さな破片が多く、また無文の土器破片が多かったため、時代を特定できるものが少なかった。

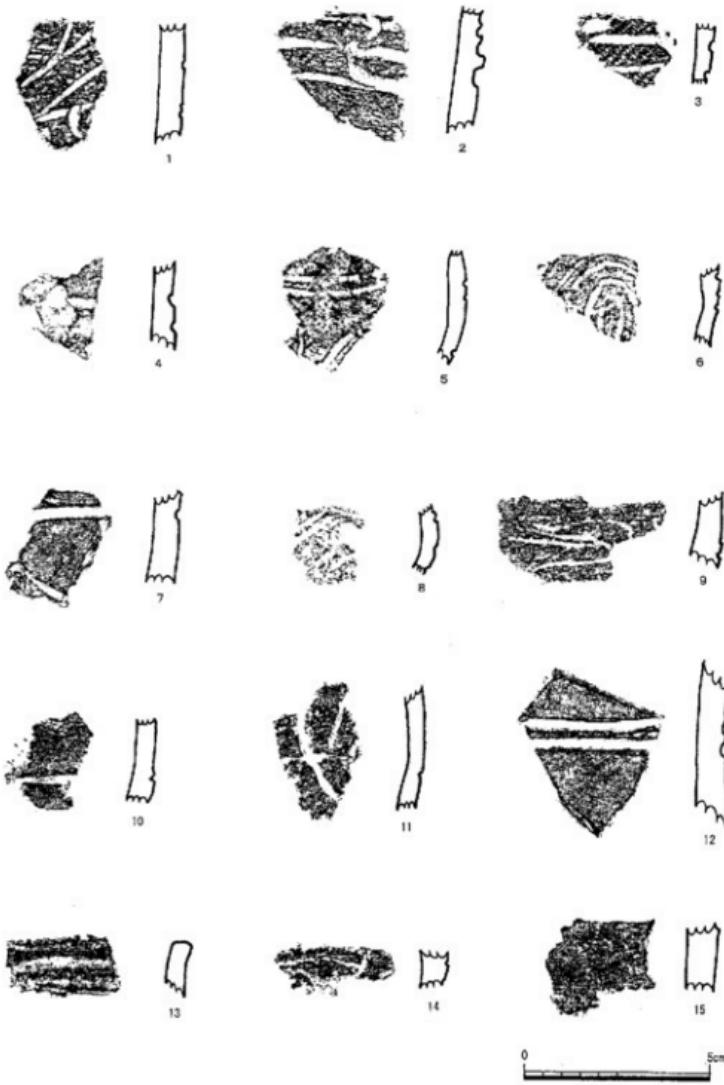
② 石 器（第19図・第20図）

本調査区からは、20点の石器が出土した。出土した石器のほとんどが調査区中央部から出土している。

1は有茎石鏃で、全体的に調整が粗い。石質は赤色頁岩である。

3は凹基無茎石鏃で、全体に調整がみられるがやや粗い。石質は硬質頁岩である。

2・4～9は搔器をまとめた。石質は4が珪質頁岩、その他はすべて硬質頁岩であった。



第14図 出土土器(1)



15



16



17



19



20



21



23



24



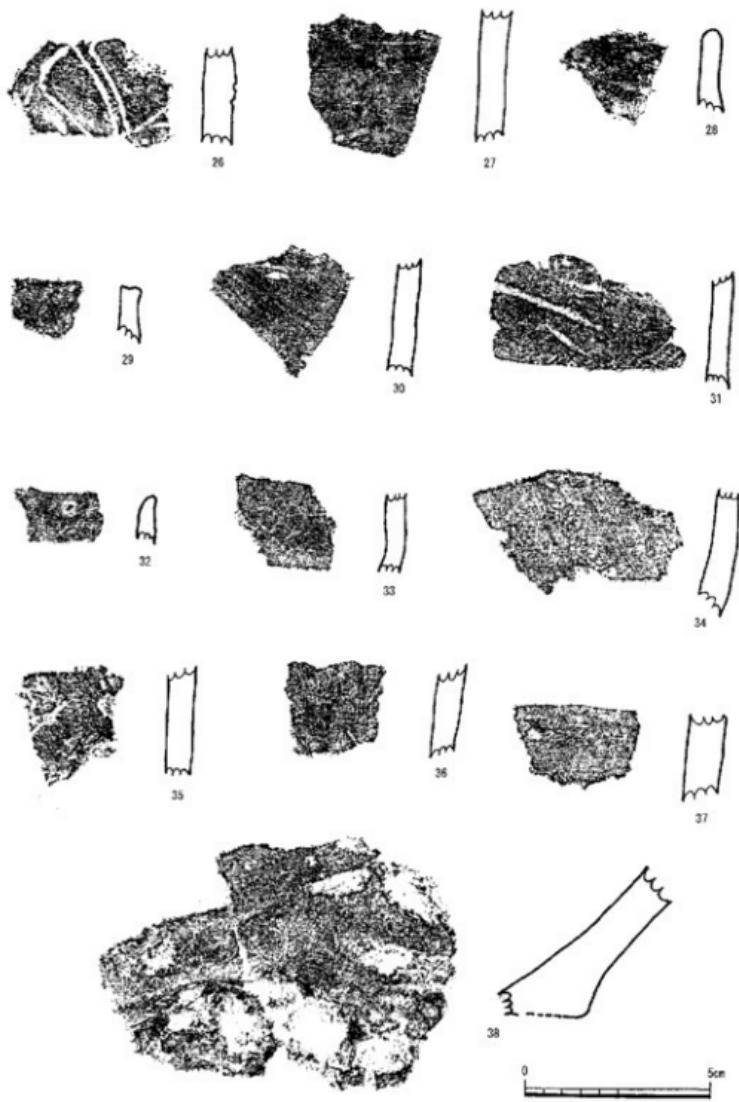
25



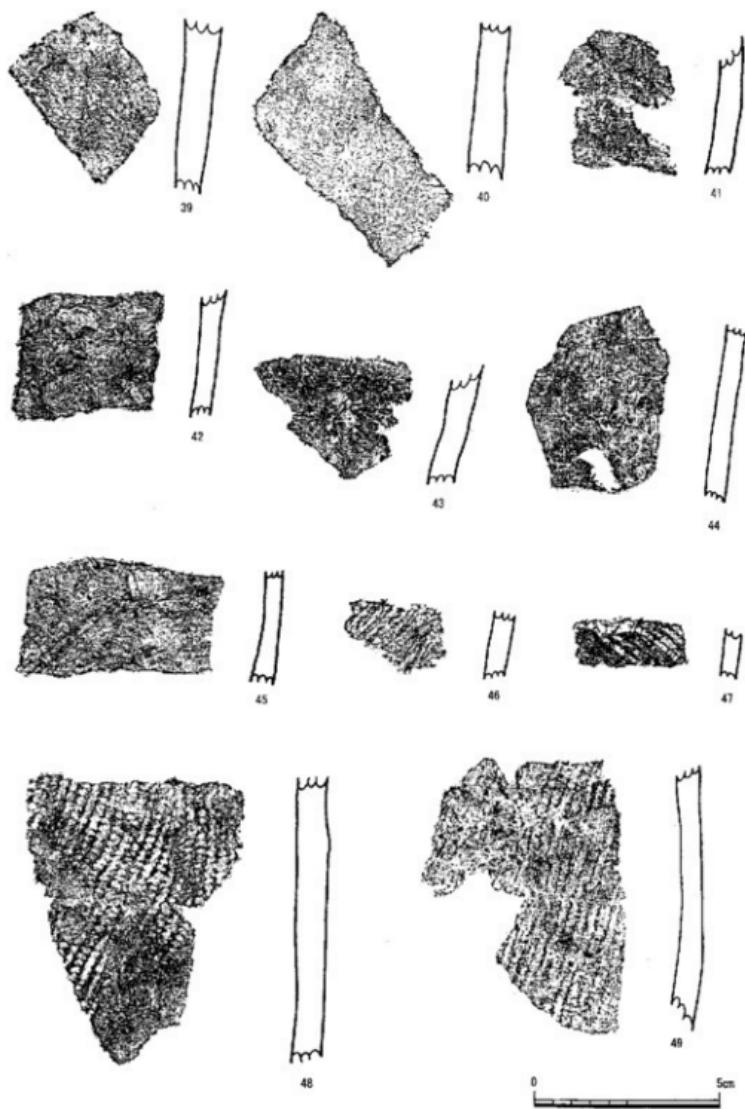
26



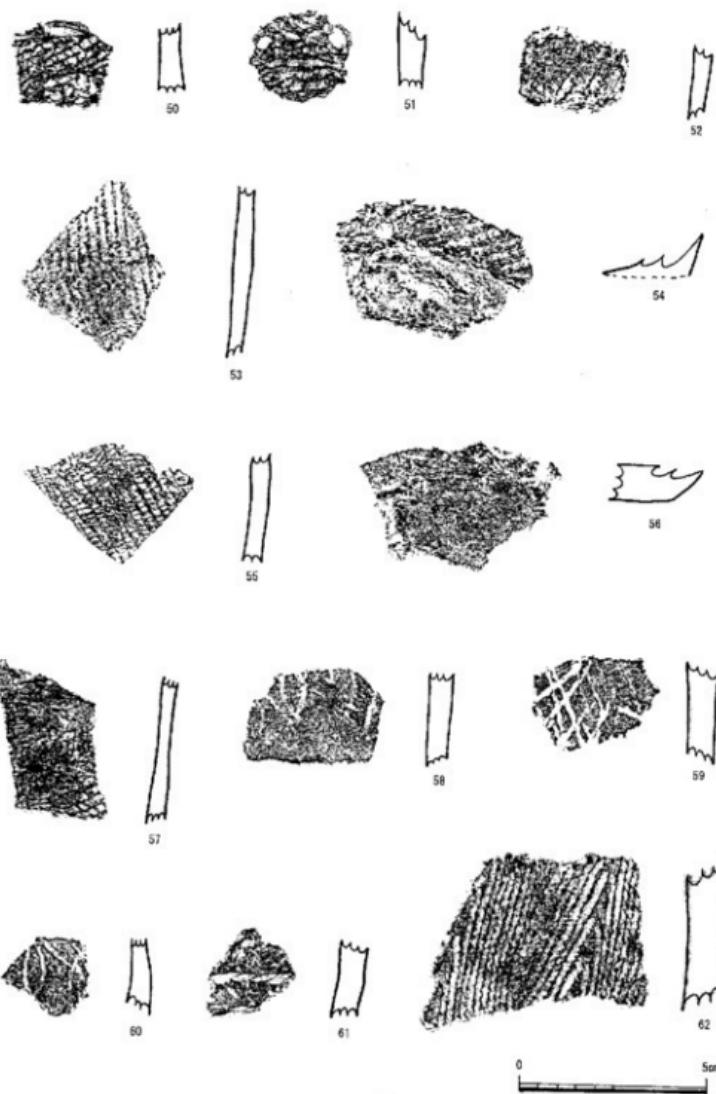
第15図 出土土器 (2)



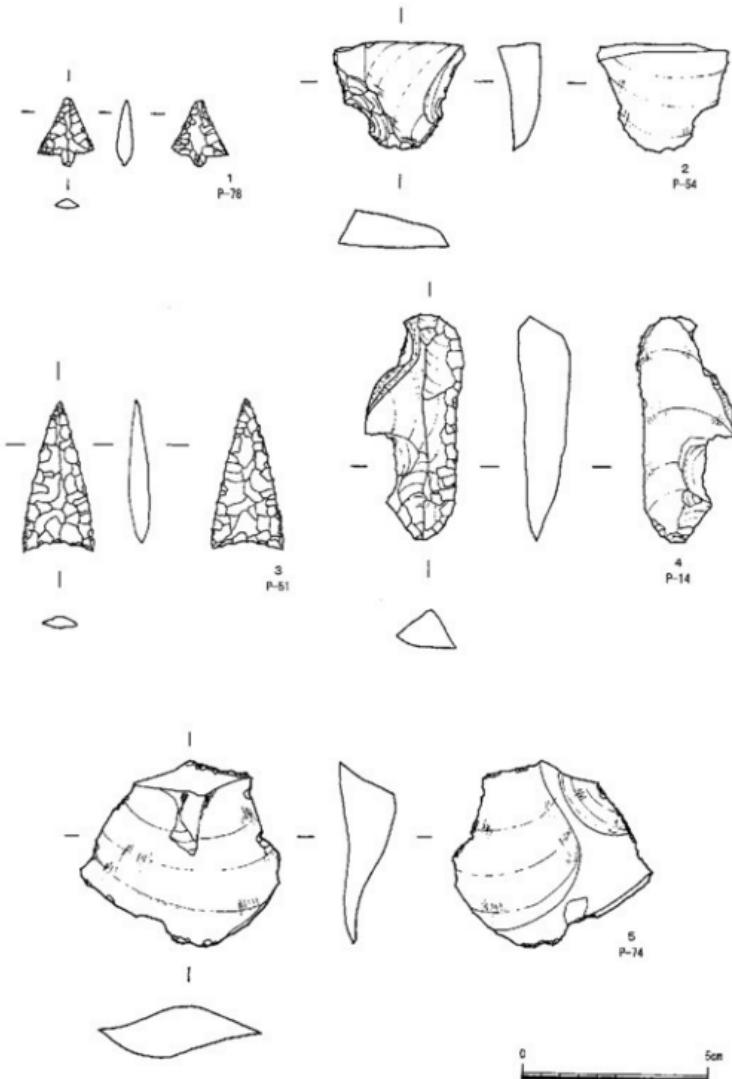
第16図 出土土器(3)



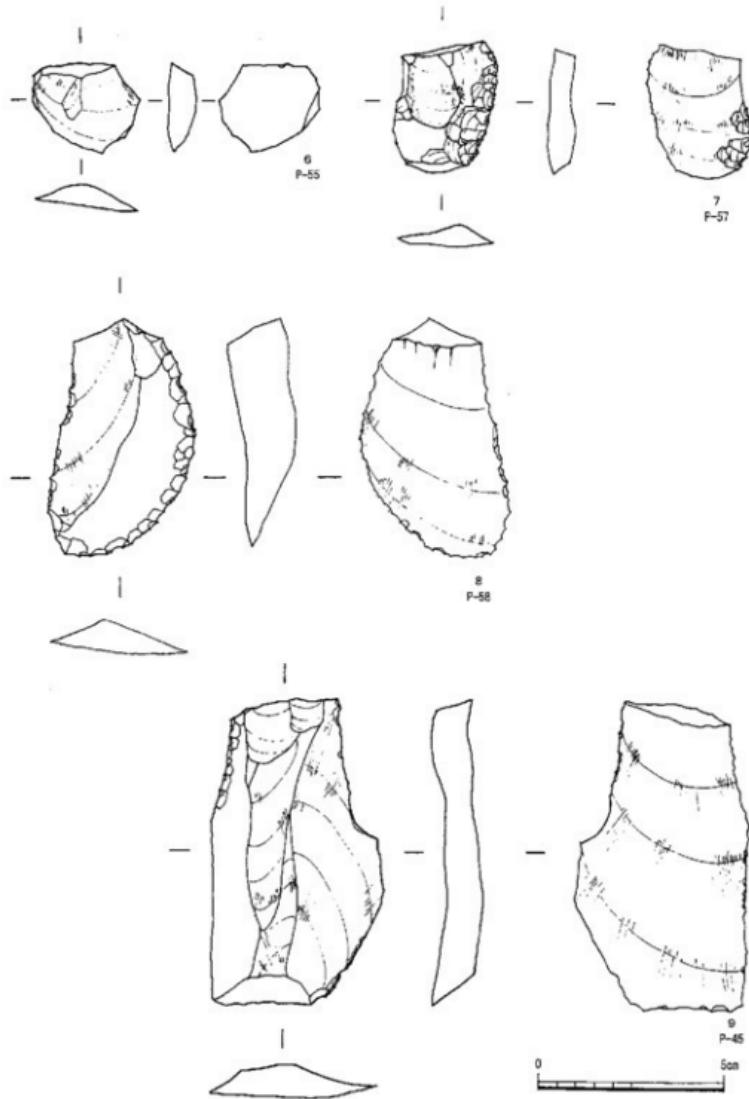
第17図 出土土器(4)



第18図 出土土器(5)



第19図 出土石器実測図(1)



第20図 出土石器実測図(2)

緑玢岩、凝灰岩、石英安山岩、軽石であった。構築時期は、確認面から編文時代後期と考えられ、3基の配石遺構に付加した遺構であると考えられている。

(4) 配石遺構の形態分類

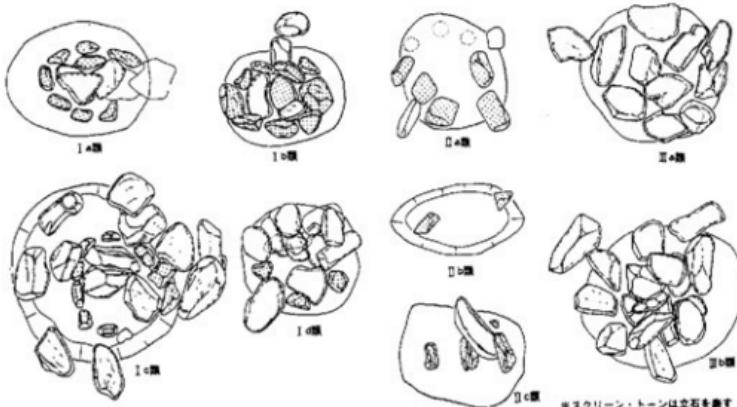
配石遺構の形態については、昭和62年に行われた第3次調査での「一本木後口配石遺構群」の分類に基づいて分類を行っている。第3次調査での分類は以下のとおりである。

I類：縁辺部に立石を巡らすもので、内・外部構造から4つに細分される。

- 縁辺部形態が梢円形を呈し、その内部に平石を数個置いたもの
- 形態が梢円形を呈し、その内部中央に立石を立て、その隙間に平石を置くもの
- 形態が円形を呈し、その内部に数個～十数個の平石を積み、さらに縁辺部外側に石を環状に巡らすもの
- 下部土坑の四方向に立石を立て、その内部に平石を数個置き、さらにその縁辺部を覆うように斜めに立石を巡らすもの

II類：立石のみで配石が作られるもので、3つに細分される。

- 縁辺部に立石を梢円形に巡らすもの
- 配石下土坑の長軸両端に一対の立石を立てるもの
- 配石下土坑の長軸両端に一対の立石をたて、そのほぼ中間（土坑中央部）に数個の



第22図 配石遺構形態分類図

小さな石を立てるもの

III類：配石縁辺部に平石を巡らせるもので、2つに細分される。

a. 石の長軸を連結させ、円形に一巡させるもので、その内部に石が雑然と積まれるもの

b. 石の長軸を中心に向け、所謂放射状に置き、その内部には石が雑然と積まれるもの

万座配石遺構群、野中堂配石遺構群、今年度検出された配石遺構についての形態は、第8表にまとめたとおりである。第23図・第24図は、万座配石遺構群、野中堂配石遺構群、今年度検出された配石遺構について示したものである。立石のほか、図面や写真などから立石と考えられるものについて、スクリーントーンで表した。

万座配石遺構群については前述したように、資材置き場として利用された経緯もあるため配石部が攪乱・消失されている部分も見られ、形態分類が困難なものもある。比較的状態の良い第702号・第704号・第705号配石遺構を見ると、3基とも配石遺構の縁辺部に立石を巡らしており、I類に分類される。また、楕円形に組んであり、内側に平らな石を置いていることからIa類にあてはまる。

野中堂配石遺構群においては、第1号・第2号配石遺構の配石部について判断することはできないが、第3号配石遺構は縁辺部に立石を巡らしていることからI類のうちに分類されると考えられる。

今年度検出された配石遺構3基については、第IV章すでに述べたが、第1号・第2号配石遺構は縁辺部に立石を巡らせ、内側に平らな石を配置していることからIa類に分類される。第3号配石遺構については、前述のとおり道路の下敷きとなっていたため立石の一部、特に長軸である南北両端の石が倒されていたものとみられることから、本来はIa類に分類されると考えられる。

(5) 万座配石遺構群と野中堂配石遺構群との関連性

ここまで、万座配石遺構群と野中堂配石遺構群についてみてきたが、この2つの配石遺構群には以下の共通点を見出すことができる。

- ① それぞれ万座壇状列石・野中堂壇状列石の南に位置する
- ② 配石の形態がIa類に分類される
- ③ 配石の下部に土坑もしくは埋設土器が確認される
- ④ 配石部に石英閃綠玢岩が使用される割合が圧倒的に多い

第8表 万座・野中堂配石遺構群観察表

万座配石遺構群（第8次）

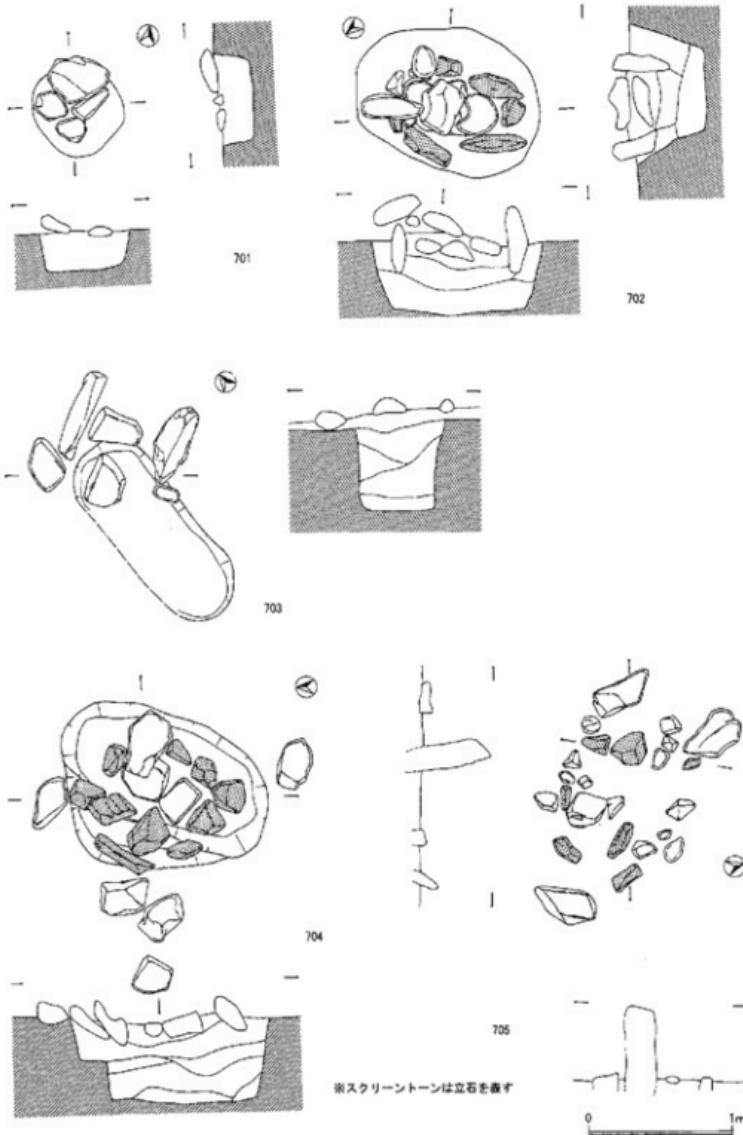
配石 No.	確認地点	確認面	配石		土床		長軸方向	赤色 範囲	出土遺物	備考
			形態	規模 (cm)	平面形	規模 (cm)				
701	ZA-55	III d			円形	65×60			なし	石英閃緑玢岩
702	ZA-63	III d	橢円形	100×75	橢円形	131×100×49	N-55° -E		なし	石英閃緑玢岩
703	ZB-64	III d			橢円形	145×(56)×62	N-6° -E		なし	石英閃緑玢岩
704	ZA-62	III d	橢円形	90×75	橢円形	154×80×66	N-27° -E		なし	石英閃緑玢岩
705			橢円形	90×()	未観	未観				石英閃緑玢岩
706	ZB-64	III d			橢円形	155×90×40	N-0° -S		なし	
707	ZA-64				橢円形	73×52×37	N-0° -S		なし	

野中堂配石遺構群（第18次）

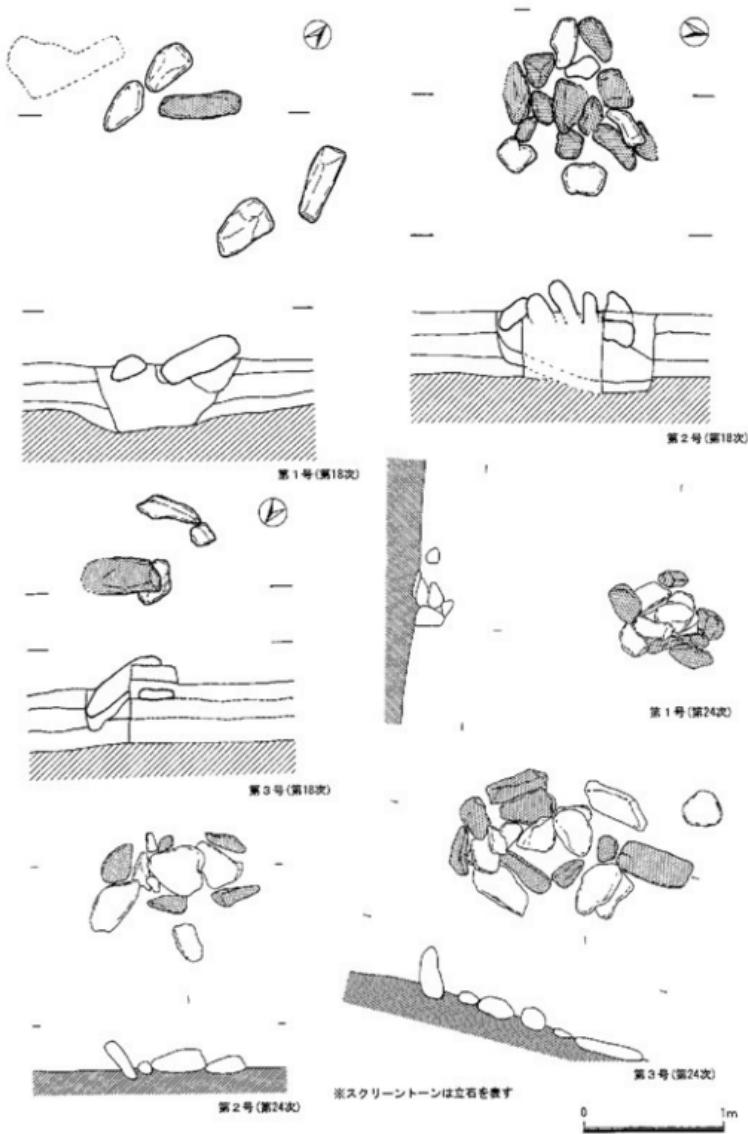
配石 No.	確認地点	確認面	配石		土床		長軸方向	赤色 範囲	出土遺物	備考
			形態	規模 (cm)	平面形	規模 (cm)				
1	W-82	III d		110×()	橢円形	(120)×100			なし	石英閃緑玢岩
2	X-82・ 83	III d	橢円形	120×100	橢円形	(140)×110				主に石英閃緑玢岩、その他藍灰岩、石英安山岩
3	V・W- 83	III d		100×70	なし	—		■	壁棺	石英閃緑玢岩 埋設土管

第24次検出配石遺構

配石 No.	確認地点	確認面	配石		土床		長軸方向	赤色 範囲	出土遺物	備考
			形態	規模 (cm)	平面形	規模 (cm)				
1	AD- 61・62	III d	橢円形	88×59	橢円形	(151)×105×29	N-92° -E	×	なし	石英閃緑玢岩
2	AA- 71・72	III d	橢円形	101×86	橢円形	(122)×73×44	N-18° -W	×	なし	石英閃緑玢岩
3	AE-63	III d	橢円形	171×102	未観	未観	N-2° -W	×	なし	石英閃緑玢岩



第23図 万座配石遺構群実測図



第24図 野中堂配石遺構群実測図

⑤ 遺構内からの遺物が極めて少ない

万座配石遺構群、野中堂配石遺構群の構築時期は、遺構の確認土層や周辺の出土遺物などからいざれも縄文時代後期と判断されている。これは、万座環状列石、野中堂環状列石ともほぼ同時期であることから、これらの配石遺構群は環状列石に伴うものか、少なくとも環状列石と関連のある遺構といえる。

2 配石列について

今年度、調査区の中央部から検出された配石列は、前述した「野中堂配石遺構群」の配石列と規模や方角などにおいて酷似している（第9表）。

第18次、今年度と配石列の検出が続いたが、その性格を解明する資料とはならなかった。しかし、ともに配石遺構に隣接して検出されており、構築時期も同時期であることから、これらの配石列は配石遺構群とセットになる遺構であるといえる。

その性格については、万座環状列石・野中堂環状列石内で検出されている配石列と同じように境界を示すものである可能性が考えられる。また、これらの配石列が延びる方向には、野中堂環状列石の出入り口があるほか、さらに延長すると黒森山へとたどり着くことから、目標とするものに対しての方向付けのための施設である可能性も考えられる。

来年度の調査区にも配石遺構が延びる可能性が高く、配石列が検出される可能性も高いことから、配石列の性格の解明を今後の課題のひとつとしたい。

第9表 配石列観察表

	確認地点	確認面	規模 (全長m)	方向	石 質
配石列(第18次)	X-82・83・84	III d	7.36	N-12°-E	石英閃綠玢岩、凝灰岩、 石英安山岩、軽石
配石列(第24次)	A B -69	III d	7.97	N-5°-W	石英閃綠玢岩、安山岩、 綠色凝灰岩

第VI章 調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、鹿角市十和田大湯字万座、野中堂、一本木後口に所在する。遺跡は縄文時代早期から平安時代までの長い期間にわたって営まれるが、縄文時代後期前葉には、万座・野中堂の2つの環状列石を中心に建物跡や配石遺構群などのさまざまな遺構が構築され、大規模な「マツリと折りの場」として利用されていたことが明らかとなっている。

昭和59年度から始まった鹿角市教育委員会による調査は今年度で第24次を迎えた。24年もの長い期間にわたる調査で、環状列石周辺に構築された遺構についての解明も進み、縄文人がこの台地上を効率よく、すみずみまで利用していたことが判明してきている。

今年度の調査区は、史跡の南側に位置するH₁区である。野中堂環状列石の南側でもある史跡の南側には、第18次調査において確認された「野中堂配石遺構群」があり、配石遺構3基と配石列1条が検出されている。本調査区は、そのさらに南側にあたることから、「野中堂配石遺構群」の分布が南側に広がるかどうかを確認することが主な目的であった。

調査の結果、配石遺構3基と配石列1条が検出され、これらが「野中堂配石遺構群」の配石列の延長線上に沿った状態で確認されたことから、「野中堂配石遺構群」の分布が南側に広がっていることが確認された。また、今年度検出された配石遺構に使用された石はすべて石英閃綠玢岩であった。これまで、万座・野中堂の2つの環状列石については石英閃綠玢岩という石へのこだわりが強いということが判明していたが、今回の調査の結果を受けて、環状列石から離れた地点においても石へのこだわりが強いということが確認された。

今年度の調査区の南側には平成21年度調査予定地（H₂区）が広がっている。平成17年、18年に遺跡の縁にあたる東西の台地斜面部分の踏査を行った際には、H₂区に隣接する斜面部で石英閃綠玢岩を十数個確認している。今回の調査結果も含めて考えると、H₂区にも配石遺構が分布している可能性は高い。今年度の調査では「野中堂配石遺構群」から直線状に配石遺構が延びていることが判明したが、「野中堂配石遺構群」の配石列と、今年度検出された配石列が一直線に並ぶわけではないことから、「一本木後口配石遺構群」のように弧状に配置されている可能性も考え、「野中堂配石遺構群」の分布状況や性格解明に向けて慎重に調査を行っていきたい。

参考文献

- 鈴木克彦 『北日本の縄文後期土器編年研究』雄山閣 2001年
- 成田滋彦 「青森県の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』雄山閣 1981年
- 高橋忠彦 「秋田県の縄文時代後期の土器」『研究紀要 第4号』
秋田県埋蔵文化財センター 1989年
- 文化財保護委員会 『大湯町環状列石』 1953年
- 岩木山刊行会 『岩木山 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』 1968年
- 秋田県教育委員会 『大湯環状列石周辺遺跡分布調査概要』 1975年
- 秋田県教育委員会・鹿角市教育委員会
『大湯環状列石周辺遺跡緊急分布調査報告書』 1974年
- 鹿角市 『鹿角市史 第1巻』 1982年
- 鹿角市教育委員会 『昭和50年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』 1976年
- 鹿角市教育委員会 『昭和51年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』 1977年
- 鹿角市教育委員会 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)～(6)』 1984～1989年
- 鹿角市教育委員会 『大湯環状列石発掘調査報告書(7)』 1990年
- 鹿角市教育委員会 『大湯環状列石発掘調査報告書(8)』 1991年
- 鹿角市教育委員会 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(9)～(23)』 1992～2007年



PL 1 第1号配石遺構(1)



石ナンパリング後



石 1・2 除去後



石 3・4・7 除去後



石 6 除去後



石除去後（西から）



除去した石（左から 1・2・7・4・3・6）

PL.2 第1号配石遺構(2)



PL 3 第1号配石造構(3)



PL.4 第2号配石遺構(1)



PL 5 第2号配石構造(2)



石ナンパリング後



石1除去後



石4除去後



石2除去後



石3除去後



除去した石（左から1・4・2・3）

PL.6 第2号配石遺構(3)



PL 7 第2号配石遺構(4)



PL. 8 第2号配石遺構(5)



PL 9 第3号配石遺構(1)



PL10 第3号配石遺構(2)



PL11 第1号配石列



PL12 出土土器(1)



PL13 出土土器 (2)



PL14 出土土器 (3)



PL15 出土土器(4)



PL16 出土土器(5)



PL17 出土石器

報 告 書 抄 錄

鹿角市文化財調査資料93

特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(24)

発行年月日 平成20年3月31日

発 行 者 鹿角市教育委員会

〒018-5292

秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1

Tel. 0186-30-0294(生涯学習課生涯学習・文化班)

印 刷 所 株式会社 米代新報社
